

吉良吉影と奇妙な魔法 学校

冥竜王ツカサ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このssは杜王町に住んでいた殺人鬼、吉良吉影が東方仗助にやられた後ハリポッターの世界に転移する話です。全体的に大規模なキャラ崩壊が生じております。これらが苦手な方はブラウザバックしてください。後2話から4話まではセリフのみとなっております。

あとお気に入り登録すると間も無くホグワーツへの招待状がサンジェルマンの袋入りで届けられます。(モナリザで勃起出来る人のみ)

一応高校生ですので中間、期末試験期間中は更新できません(〸〸)

(宣伝) 作者のオリジナル作品のヤンデレ狗神と高雅の巫女も見てみてください！

目次

吉良吉影とアズカバンの囚人

第1話 零れ落ちた殺人鬼 | 1

第2話魔法使いとスタンド使いの邂逅

20

第3話魔法使いとスタンド使いはひか

れ合う | 38

第4話スライムと矢と不審者と

49

第5話ACIDMAN① | 59

第6話ACIDMAN② | 68

第7話 新たな歪み | 76

第8話 我らは法の体現者 | 88

吉良吉影と炎のゴブレット

第9話ヒロインと新たな演者 |

吉良吉影とアズカバンの囚人

第1話 零れ落ちた殺人鬼

1999年 杜王町

杉本鈴美「裁いてもらうがいいわッ！ 吉良吉影」

今ここで、この誰もいない小道で長きにわたり町を侵していた殺人鬼、吉良吉影が1人の少女により裁かれようとしていた。

「わたしはどこに連れて行かれるんだ…？ あ…ああ…」 得体の知れない無数の手に掴まれながら吉良吉影は恐怖混じりの声で聞く。

「さあ…？ 少なくとも安心なんてないところよ」

少女は自分を殺した殺人鬼に無情に判決を下した。

「ウアアアアアア！！」 絶望の声をあげながら殺人鬼は次元の彼方に消え去りつた。そしてそのまま殺人鬼の魂は浄化された

はずだった……

「——ア！ ハッ！」

吉良は石畳の上で目を覚ました。

「(ハッ、ハッ)は……私はどうなったのだっ!？」

吉良の記憶は犬に腕を噛まれ小道の後ろを振り向いてしまい、無数の手に引き込まれて行くところで途切れていた。

《さあ……? 少なくとも安心なんてないところよ》その時あの少女の声が頭に浮かぶ

「まさかここは……私は地獄とかいうところにも落ちてしまったのか……!？」

しかしそうではないことに気がつく。

「ようこそホグズミードへ」

目の前には垂れ幕が掛かっており、その向こうにはたくさんの店が並んでいた。

「ホグズミードっ!？」 私は外国にいるのかっ!？」 吉良は自分の置かれている状況を理解しようとするが、(もつと情報を集めなければ動けんっ!)

ひとしきり考えた後

「キラークイーンは出せるのか……？ キラークイーンっ!!」自分の分身でもある「スタンド」をだす。

「……………」ピンクの仏頂面をしたネコ型の化け物が吉良を見下ろしていた。

「キラークイーンは出せる……」スタンドを出せることに安心した吉良は周りの様子を見ることにした……

「まだでたばかり……試作品だ……」「世界一早い箒なんだよね、お父さん？」

「一体なにが売っているんだ……？」側の店に出来ている人だかりに近づいてみる。

「アイルランド・インターナショナル・サイドから、先日、この美人箒を7本もご注文いただきました！」ここでは世界一速い箒という文言で箒が売られていた。

吉良はおよそありえない光景に戸惑う。

「箒？ ファイヤボルト？ 時速240km?! 魔法の世界か何かかっ?!」

しかし吉良は持ち前の性格で冷静になり、他の店を回ることにした。

「フウウウウ、杖といい魔法動物といい私はやはり魔法の世界に連れてこられたようだな」結果：私は魔法の世界につれてこられたようだな

超高速理解した吉良は次の行動に出る。

「たぶん日本の紙幣は使えないのだろうな、となると……」

「おい急に立ち止まらなくてくれっ!」「すまない、ちよつとめまいがしたものでね」そ

ここで吉良はキラークイーンを出す。

「……………」

「キラークイーンで奴から財布を盗ったっ！」 コソ泥である。

金の心配も無くなった吉良は「これで……一安心だが……この世界でも私は平穩を得られるのだろうか……」と考えるが、

「しかしあのクソツタレ仗助や空条承太郎がいらないと思うと……ククク……ハアハッハッハ！ それだけで私の心がやすらぐっ！」 自分を邪魔する虫共がいらないと思うだけで笑いが止まらない吉良であった。

ひとしきり笑ったあと「フフフ……とりあえず 今夜の寝床を探すとするか……ン？」 宿を探すことにする。

「友達から聞いたんだけど脱走したシリウスがホグワーツに向かっているらしいよ」「それやばくないっ 今日新任教師のあとにダンブルドア校長先生から話があるんじゃない？」 隣を通る学生の集団を見て

「ホグワーツ……か……そこに行つてこの世界の事を調べてみるか。フフ……子供の頃行きたくもないサマーキャンプの宝探しでこんな風を探し回ったな」

「幸いにもこの服装だから生徒に怪しまれる事をないだろう……」吉良、幸いか不幸か教師になるようです。

ホグワーツ内

吉良吉影 「こんなに人がいるとは……杜王町ではあり得ない光景だな」案外警備がザルだった（幻惑魔法かかってただけどね…）ためか簡単に学園内に侵入できた吉良は思わぬ光景に歓喜する。

「それにこの女どもの手……アフウー…… ここは天国なんじゃあないか!？」そんな感じで1人で（物陰で）小躍りしてると、

「……? あなた新任教師の方ですか? 勝手に校舎内に出歩かれては困りますっ!」明らかに見た目からしてめんどくさそーな先生が吉良を睨んでいた。

「（しまった……! この時間に先生がうろついているとは予想外だったっ!!）」
いやー普通先生くらいいますって

「そもそもあなた……新任教師ですかっ!？」

先生が疑いの目を強める。

「……………（まずい……こんな人目のつくところでバレるなんて……少々面倒だがここで『始末』するしかないっ!）」

焦った吉良はキラークイーンを出そうとするが、

「ほっほっほ。その心配はありませんよマグゴナガル先生」愉快そうに笑う老人の声に2人とも「何っ!!」

2人ともビククリして後ろを振り向く。

「あ、ダンブルドア校長ではありませんかっ！ 聞いてください！この男が……」

「この人は私の友人の教え子じゃよマグゴナガル先生。名前は確か……」ダンブルドア校長と呼ばれた赤いローブを着て丸メガネをかけた老人はヒゲをさすりながら吉良の方を見る。

「……吉良……吉影だ……」

「そうじゃキラヨシカゲ君じゃったな。 hogwarts に来たのは初めてじゃろうし一緒に散歩でもするかおう？」

「……お言葉に……甘えて……」

とりあえず話を合わせた方がいいと考えた吉良はダンブルドアについて行く――

「……………」

そんな2人をマグゴナガルはジーっと睨みながら見送った……

「……なぜ……私を助けた……？」

自分を助けたからには理由があると考えた吉良は老人に尋ねる。

「ん〜そうじゃの〜君がこのhogwartsにの役に立つと思っただからかのー。」ひょうひょうとダンブルドアは答えた。

「……………」

吉良の人生経験上こういう得体の知れない人間は危険だと知っているため吉良の警戒リストに入れておく。

「ふむ…キラヨシカゲ君、君にはアーガス・フィルチ君と一緒にホグワーツの管理人をやつてもらうかのー。」

「(なにイイー！)よりによつて一番面倒くさそうな仕事に…!」吉良は絶句する。

「安心するんじや、そこまで面倒な仕事じゃないぞいー。」吉良の露骨に嫌そうな顔を見てそう付け加える。

「(共同作業か…面倒な奴じゃなければいいが…)とりあえず吉良は溜飲をさげた。「まあ新学期パーティーまではまだ時間があるしゆつくりしてつてくれ。」

そう言いながらダンブルドアは人ごみに消えていった

「厄介ごと…巻き込まれてしまった…のか…?」

先ほどまで校長と話をしていた自分を観察している生徒を見渡しながら呟く。

「時間があるならそのフィルチとかいう奴に会つてみるか…名前からして男性なのだろうが…」

フィルチという男のイメージを想像しながら足を進める吉良であった。

ホグワーツ管理部屋

「で、君が私のお手伝いをする…」

フィルチと呼ばれる白髪の髪をだらしなくボサボサにし、酷く腰の曲がった小柄な老人と吉良は話していた。

「吉良吉影だ…あくまで対等な立場だがな…」

自分より背の低いフィルチを見下ろしながら自分の立場を明らかにしておく。

「ええい黙らんかこのクソガキがつ私の方が年上だぞっ！」

フィルチが喚き散らす吉良は華麗にスルーする。それから周りを見渡すと、

「ミャオ……」

「猫か？」

部屋の隅の方で聞き慣れた猫の声がしたため辺りを見渡す。

「私の愛ネコのミセス・ノリスだよ。ミセス・ノリスどこにいるんだー？」

嘘つけと思いながら声のする方を向くと

ドドドドドド

「あ、あれは……そんな馬鹿ななぜこいつがここにいるんだ……?!」そこにいるものを見て吉良は驚く。

「こいつはストレイ・キャットツ!!」

前の世界、つまり杜王町で吉良が隠れていた川尻の家で殺された猫がスタンド能力故に草の融合体として生まれ変わった姿である。まさか会えるとはと驚きに浸っていると、

「お前人の話聞いてたかこのタコっ！ こいつの名前はミセス・ノリスだよっ！

」「こういううるさい人は嫌われますよ！

」名前など関係ない、こいつをこちらに渡してもらおうか」

大事なペット（？）を取り返そうと隅の方へ歩いて行く吉良だが、行く手をファイルチが遮る。

「お前なんか絶対渡すかよっ!! こっから出てけっ!」

「(ハア:まあもとより穩便に済ませないとは思っていたが……こいつを『始末』するとダンブルドアに疑われてしまうっ! どうする……?)」いつもならこういう輩は……

「ぼーとつったんてんじゃーねーぞ、このトンチキがっ!!」

「すまなかつたな、お詫びにこの金ぴかの金貨を受け取ってほしい。顔が映るほどピカピカの金貨だぞ?」

金で釣る作戦にでた。

「ケツ金で釣れるなんて思うなよっ! 金はもらっておくけどなっ」

性格が悪いと金にもがめついたのである。(偏見)

「フフフ……」吉良の考えている作戦があつさり実行できたことに笑みがこぼれる。
「何がおかしいっ!」

「……いや君はもう既にキラークイーンによつて『再起不能』にされているのだからね
……私のスタンド『キラークイーン』の能力は触れたものを爆弾に変える、金貨だろー
とクク……なんだろーと……」

そう、キラークイーンの能力は

「?!」

「気づいてももう遅いつ!! キラークイーンツ 第一の爆弾ツツ!」

ドツグオオオオオン

触つたものを爆弾にできる能力だ…!!

「……………」バタツ フィルチはちからつきた!

「まあ爆破を加減しておいたから病院に数ヶ月もいれば完治するだろう」未だ未知の世界で殺人を犯したくないからか爆発を抑えたのであった。

「さてと……………おいその君、フィルチさんがやけどしてしまったんだが……………そこらへんの病院に案内してくれないかい?」たまたま通りかかった生徒に声をかける。

「そのくらの火傷ならマダム・ボンフリー先生の所に行けばいいと思うけど……………」煙を上げているフィルチとそこに平然と佇むイケメンのギャップに戸惑いながら答える生徒

えっ「……………」キ、キラークイーンツツ!!」

ドグオオオオンドグオオオオンドグオオオオン

「カワイソーだが全治3年にしてやったぞっ!! (誰にも見られてないよな…?)」

さっきの生徒がいなくなつてから爆破した吉良だったがとある3人組に一部始終を見られてしまったのであった…

フィルチ「……………」へんじがない、ただのじゆうしようにんのようだ

「な、なんだあいつの魔法っ!? ゴイル、あいつのこと知ってるか?」

3人組のリーダーフオイ改めマルフオイが子分2人に聞く。

「知りまへんでー」あたりまえだ

「ちつ役立たずめっ！ 後でスネイプに聞いておくっ！ 後に続けお前たち！ 早くしろっ」

どこぞの王子のような台詞をはき場を後にする。

「っハイ……」君らはブロッコリーか

「ん……誰かに見られていたか……見られていたなら……『始末』しなければいけないかった……」後ろに気配を感じたが誰もいなかったため吉良もまたこの場を去るのであった……

新学期始業式

「あー今学期から、嬉しいことに、新任の先生を3人、お迎えすることになった」

ダンブルドア校長の声で騒がしかった生徒達の声が止んでいった。

「どんな先生が入ってくるんだらうな？」

ようやく出番が来たハリーポッターが友達達のロンに話しかける。

「またロックハートみたいなのやっじゃないかなければいいけどなっ」

去年の講師だったヘボ教師を思い浮かべるロン。

「えー今学期闇の魔術に対する防衛を教えてくれるのは……リーマス・ルーピン先生じゃーっ！」

「ルーピン先生だっ！」

先刻電車の中であつた先生だと気付きおもわず叫ぶ。

「それから魔法生物学を教えてくれるハドリック先生じゃっ」

そこには大柄でヒゲがもじやもじやの大男が嬉しそうに手を振っていた。

「ハグリッドがこつちに手振ってくれてるわよっ！」

ハーマイオニーがハリーに教えてあげるが

「そんなことないよ。多分他の人だよ。」なぜかスルーする

「(全く……次は私の番じゃあないか。人前で注目を浴びることは私が最も嫌っている事の一つだったというのに……まあ好かれず嫌われず無難な態度をとっておけばいいか……)」

吉良にとつてこういう環境は大の苦手なのだがそこはこらえ席を立つ。

「次は新しくホグワーツの管理人になる……キラ・ヨシカゲ先生じゃっ！」

吉良の名前が呼ばれると席のあちらこちらから黄色い声が飛ぶ。

「うわ あの人かっこよくなーい!？」

「スタイルもちよーいじゃーん！」

「フィルチはどうしたんだろう？」そんな中ハリーは本来の Hogwartz の管理人フィルチを思い浮かべるが

「態度が悪くて首になったんじゃないのかなあ？ あいつやたらと罰あたえてがるしさー」

日頃の態度は重要なのである

「新しく Hogwartz の管理人になる吉良吉影だ……というのも……」

ダンブルドアに目を向ける

「というのも本当はフィルチ先生と一緒にだっただんじやが突然聖マングゴ病院に入院することになってのー」（チラツ）まるで吉良が爆破したことを知っているかのような目つきで吉良をみる。

「（こ、こいつはあの現場にいなかったっ、う、うろたえるんじゃない！ この吉良吉影はうろたえないっ！）」

つくづく恐ろしいジーンさんであることを改めて認識する。

「まあフィルチ先生の容態が良くなり次第管理人に復帰するらしいから心配しなくても大丈夫じゃぞっ」

「えー」そこはいつてやるな

「や、やっぱりあいつがフィルチのやつを……？ さっきのは見間違いじゃなかったのか？」

先ほどの光景を浮かべ震えるマルフォイ、そこに

「我輩もあいつのことは気になっている」

背後に大きいコウモリのいうな出で立ちをしたスネイプ先生が立っていた。

「先生、いつに間にっ！」

どつかの元山賊のようなポーズをしながらゴイルが叫ぶ

「さっきまで講師席に座ってませんでしたっけ!？」

クラップも思わず叫ぶ

「我輩を舐めるんじゃないぞ……このくらい朝飯前だ……マルフォイ、やつに関する情報が入ったらすぐに教えてやろう……」

なぜかキレ気味でクラップとゴイルを黙らせる

「あ、ありがとうございますっ」

とりあえず助っ人が出来て安堵するフォイであった。

ホグワーツ魔法学校大食堂裏

到底人が入れる場所ではないそこに1人の男がいた。

「今回入ってくる新任教師は……ルーピンっ!? なぜっ!? まさか僕が隠れていることがわかって……?」

背が丸まっていてボロボロの服を着たネズミのような男は天井裏に貼り付き始業式の様子を見ていた。

「ん……? あの男は……? あのスクイブを爆破した男か……あんな呪文見たことがないっ! ただでさえシリウスがここに来るかもしれないのにこんなっ! ……」

男は恐怖に顔がこわばる

「もし僕の正体がばれ……あの事件の真相が暴かれたらっ……使うしかない……あの方からもらった物を使うしかないっ……この「弓と矢」をつ……!」

ドドドドドドドドドド

ホグワーツ管理人部屋

「フー、やつと気が落ち着く……ダンブルドアはあまりハードな仕事ではないと言っていたが……この多人数の場所で平穏と『彼女』を手に入れることはできるのか?」

改めて考え直してみる

「(しかしストレイ・キャットがいたのは幸運だった。どんな理由であそこにいたのかはわからないがこれで『空気弾』が使える……)」

今、猫草がいることに非常に安堵していた。

「……それにしてもなんでここには拷問道具がたくさんあるんだ？ あのフィルチとかいうやつ相当悪趣味だな……」

思わず眩きながら束の間の休息を味わうのであった……

時は「約10時半」まで加速する……

校長室

「今日はいろいろ大変じゃったなっ お疲れ様じゃ」

腐っても校長なのかちゃんと吉良に労いの言葉をかける。

「お言葉ありがとうございます。で、お話とは？」

吉良はダンブルドアに話があると言われ呼び出されたのだ。

「話といっても重大な話じゃないんじゃないじゃがハリーポッターという子がいるのじゃが……」

「(ああ……あの眼鏡をかけた額に傷があるひよろつちいガキか……魔法界では有名ならしいが……この吉良吉影には関係ないことだがな……)」そんなことをポーツと考えていた

「実はじゃのうあの子がー」ダンブルドアが話し始める。

校長説明中……

「ああ、そのことに関しては理解した」

吉良は言われた内容を思い返しながら頷いた

「じゃあ夜も遅いことだし今日はもう寝なさい。おやすみキラ・ヨシカゲ君」

ダンブルドアが欠伸をしながら言う。

「ああ……分かった……」

吉良も眠かったため（なんとたつて夜の11時には眠る男である）管理部屋に戻ることにした。

ホグワーツ外庭

物音ひとつしない真つ暗な外庭に1人の男がいた。全身ガリガリでボロボロのロブを着たその外見は骸骨のように見えた。

その男が荒い息を上げながら呪詛のように何かを呟く。

??? 「ハア、ハア、……やつと……ホグワーツについた……奴は、奴はホグワーツにいる……！」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
↓

奴をつ！
この手で殺さなくては！！

第2話魔法使いとスタンド使いの邂逅

「クツクツク……」

ホグワーツ寮のとある一室で怪しげな男が頭をうづくめながら笑っていた

「この俺の『能力』を使えば我が寮の優勝だけではなく、あの目障りなハリーポッターをも倒せるな……今日のクディッチ大会中につ!!」

彼はそう言うと狂気じみた目をうかべた

……この世界にまた一つ異変が起こる……

「…………この呪文が盾の呪文で…………」ペラペラ

「…………（うゝむ。早起きには慣れてはいるがこんな長いとは思わなかった…………少し眠くなってきたぞ…………）」

そのころ Hogwarts 魔法学校の塔の上にある校長室ではみんな大好き吉良吉影がダブルドアから直々に魔法のいろはを教えてもらっていた

「あー大丈夫じゃよ。眠ってたら覚醒呪文で起こしてあげるからのう」

吉良が眠たそうにしているのを察して声をかける

「いっついや眠りそうになって無いぞっ!? いいから話を続けてくれ」

「むー、君が Hogwarts にいる上で重要なことなんじゃぞー」

「ふう……………」

常に自分のペースで生活してきた吉良吉影は早起きはともかくこんなおじさんとマントーマンの授業なんてとても耐えられるものではないのだ！

校長先生の授業が長いのでキング・クリムゾン!!

「つと。おおもうこんな時間なののお……そろそろ君の杖を選ばなければいけないのお」

日が昇ってきたことに気付いたダンブルドアが教科書をしまいながら吉良に声をかける

「そのダイアゴン横丁とやらからは少し遠いぞ。間に合うのか?」

「ほっほっほさつき教えた姿くらましじやよ」

吉良は先ほど授業で習った方法を思い浮かべるが、それをやる前提として

「私は呪文が使えないのだが?」

「わしと手をつなげば一緒にいけるぞ」

「なぜこの吉良吉影がこんなジジイと手を繋がないといけないのだ？……」わかった……早くするぞ……」

まあ当然の反応であろう 誰だってそう思う俺だってそう思う

杖を買い終わるまでキング・クリムゾン!!

オリなんとかさん「ちよつ、ワシの出番……」

「杖を選ぶのがこんなに大変だったとは……」

吉良は手に持った杖を見ながらつぶやく

ねじくれた薔薇があらわれた黒い杖で取っ手の部分には猫の頭がついているものだ

吉良のスーツ姿に不思議と似合っていた

「おっともうこんな時間じゃっ！ 早く行かんとクディッチ大会におくれてしまうぞっ」

ダンブルドアは懐中時計を見ながら焦った様子を見せる

「また姿くらましか？」

「じつはじやお、学校内では姿くらましは出来ないのじゃー。だからさつきは学校の

手前で姿くらましかをしたのじゃよ」

「(そうだったのか? そんな描写はかいていなかったが……う?)」

書かなくて悪かったな

「まあそう細かいことは気にするでないぞ」

吉良吉影「……………」

その頃クディッチ大会選手控え室ではグリフィンドールのクディッチ選手達が試合に向けて準備していた

「今年の優勝杯は我がグリフィンドールがいただくぞおお!!」

グリフィンドールのクディッチ顧問のウッド先生が選手達に向かって叫ぶ

「絶対にスリザリンには優勝杯はとらせねーぜっ!」

??ハリー の 気合い は 十分 な よう だ

「しかし今度のスリザリンも何か卑しい手を使ってくるのかねー?」

ロンのいたずら兄弟のうちの1人ジョージがつぶやく

「確かにスリザリンも厄介だがなにやらハツフルパフが必ず優勝すると吹聴して回って

いるやつがいると聞いた」

ウッドが前々から気にしていた不安要素をみんなに伝える

「誰なんすかそんな大ボケかましてる奴はよー?」

ロンのいたずら兄弟のうちの一人フレッドがウッドにつめよる

「そいつはハツフルパフで四年生のジョン・ハリソンとかいう奴だ。もつとも熱狂的なクディッチファンということで巷では話題になっているやつだったか……」

「じゃあそいつあただのホラ吹きなんじゃあないのか?」

ジョージがもつともなこと言う

「だといいがな……しかし今日はそのハツフルパフと対戦することになったのだっ
!」

「なにーっつっ!!」

その場にいる選手全員が驚いたりひっくり返ったりする

「今日はスリザリンとの対戦じゃないのか!」

敬語を使う余裕が無くなったハリーがウッドに詰め寄る(2回目)

「なんとスリザリンが怪我を理由に試合を棄権したのだっ!」

「あ、あの卑怯者がっつ！ 今日が雨だからかつ」

フレッドが憤慨して拳でベンチを叩く！

「だが試合がある以上勝つ以外に道はないっ!!」

「優勝杯目指して頑張るぞっ！」

「おおおー!!」

??? 「くくく……バカめがグリフィンドールに優勝杯はとらせないっ！」

クディッチ大会

吉良吉影 「こんな雨の中試合が行われるとはな……」

マグゴナガル 「雨天決行ですよ」

吉良吉影 「なにか面倒なことが起こらなければいいが……」

ダンブルドア 「問題は敷地外にいる吸魂鬼かのお」

吉良吉影 「吸魂鬼……？」

マグゴナガル 「普段はアズカバンという監獄の看守をしています。今は緊急の用事で
ホグワーツの周りに配置させているのです」

吉良吉影「いや、そうごとじやなくてどういいう生き物かということが聞きたかったんだが……」

ルーピン「吸魂鬼とは人々の幸福を栄養源としている生き物です。それ故にもっとも危険な生き物と言われています」

吉良吉影「誰だい君は？」

ルーピン「私は黒魔術に対する防衛の教師のリーマス・ルーピンといいます」

吉良吉影「そうか君も新しく入った先生だったね」

ルーピン「新任教師のよしみでこれからもよろしく」

吉良吉影「ああ、これからもよろしく頼むよ」

ダンブルドア「2人ともそろそろ始まるようじゃぞ」

リージョーダン「いよいよクディッチ大会が始まりましたっ!!」

クディッチ広場上空

ハリー「まずはスニツチさがさなくちゃっ！」

フレッド「なんだこのクワツフルはっ!?! 俺たちを避けて行くー!!」

ジョージ「これでは触ることすらできないっ!!」

ウッド「うろたえるんじゃないっ! グリフィンドールはうろたえないっ!!」

ハリー「な、なんかみんなの様子がおかしいっ!」

ウッド「ハリー、危ないっつ！ クワツフルがそっちへ飛んでくる!!」

ハリー「な、なにいーいーいー!!」

???「ウバツシヤヤーー!!」

教師席

マグゴナガル「な、なんですかあのクワツフルはっ!! 魔法でもかけられているので
すかつ!!」

ダンブルドア「いや、魔法ではないようじゃのう。吉良くん、何かわかるかね？」

吉良吉影「ん、私には何もわから……ん……あれは……」

ドドドドドドドドドドドドドドド

???「メツギヤヤーー!!」

……スタンド!？」

ダンブルドア「どうじゃ吉良くん、この事件を解決してくれんかの？」

マグゴナガル「いいのですかつ? こんな得体の知れない人にまかせても?」

ダンブルドア「そのかわり、生徒に怪我させたらお菓子地獄の刑じゃぞ?」

吉良吉影「ふん……少し後ろに下がってくれ……キラークイーンっ!!」

クディッチ広場上空

ハリー「と、とりあえずこいつから逃げなくてはっ!!」

??? 「メツシヤヤー!!」

ハリー 「に、逃げて追ってくる……ならばっ！」

ハリー 「うおおおー！」

なんとっ！ハリーは逆にクワツフルに突っ込んだっ！！

??? 「……チツ……あじなほうほうで回避を……」

ハリー 「お前は一体何者だっ!? 一体何が目的なんだっ」

??? 「なんだ、俺が見えてるのか……? ……まあいい、見えていようがこの俺、モーターヘッドの攻撃を避けることはできんっ！」

ハリー 「このまま避けていてもいつかは当たってしまうっ。ならば！ たまたまポケットに入っていた石をくらえっ！」

モーターヘッド 「バアカアがー！ 俺には物理的な攻撃は通じないんだよっ」

ハリー 「このままではやられてしまう……早くこのバケモノから逃げてスニツチをとり試合を終わらせなきゃっ」

教師席

吉良吉影 「倒すとは言ったものの距離が遠いから攻撃が難しい……ストレイキャットはいま用務員室に置いてきてしまった……ならばっ！ キラークイーンっ!! 財布の小銭を『爆弾』に変えろ!!」

吉良吉影「狙いはよし、いまだっ」

上空

ハリー「なんか遠くからキラキラしたものが……？」

モーターヘッド「ん、キラキラしたものだ……？」

「点火っ！」カチリ

ドゴオオオオオオオオン

ハリー「な、なんだっ!? いきなり何かが爆発したっ！」

モーターヘッド「なにつ　グガアアアアアア!!」

教師席

リージョーダン「おーっと！　雨でよく見えませんが　ハリーポッターとクワッフル

の近くでで何かが爆発しましたー!!」

マグゴナガル「な、なんですあの爆発はっ。あんな魔法は存在しないっ！」

吉良吉影「チツ、少し狙いが逸れてしまったか……だが次で確実に仕留めてやる」

上空

モーターヘッド「くっつ。飛んできたのはあそこからかつ！　いったんあそこへ行かな

ければっ!!」

ハリー「よし、やつが行った隙にスニッチを見つけないとっ」

観覧席

リージョーダン「なんとこつちにクワツフルがやってくるううう!!」

吉良吉影「こつちに気がついたか……? ちかづいてくればより狙いやすくなるな」

マグゴナガル「これはまずいです! どんどん加速してこつちにやってきていますよ

! 校長つどうするんですか!?

ダンブルドア「マグゴナガル先生やる呪文といったら一つでしよう見せてあげなさい」

マグゴナガル「ああつわかりましたよっ プロテゴ(盾の呪文)っ 私たちを守れ!」

モーターヘッド「ぶ、ぶつかるっ!」

吉良吉影「おー 中々凄い呪文だな……」

マグゴナガル「はっ盾の呪文をクワツフルが上に転がって!!」

モーターヘッド「ハッハー! 盾の呪文が発動するのを待っていたんだぜー!」

吉良吉影「くっ 真上からの攻撃かっ」

モーターヘッド「このままズタズタに引き千切ってくれるぜー!!」

吉良吉影「キラークイーンっ!!」

キラークイーン「シバツ!!」

モーターヘッド「ヒヤハアアア!」

吉良吉影 「ぐはっ。このパワーはっ 想像以上にっ!!」

モーターヘッド 「クワツフルの回転が加わってるんだぜー! ところで今気づいたがお前も俺と同じような能力を持つてるんだなー ククク、しかし能力を持つてるのは俺一人でじゅーぶんなんだぜっ!」

吉良吉影 「まづい、避けなければっ!!」

リージョーダン 「クワツフルが教師席をつき抜けたー!!」

吉良吉影 「こ、このパワーはっ! 想像以上につ!」

モーターヘッド 「チッ、ラツシュをしていたせいで狙いがそれてしまったか……」

ルーピン 「あっ! ダンブルドア校長っ! 吸魂鬼達がハリーのところにつ!!!」

ダンブルドア 「………私はあの吸魂鬼どもを追い払ってくるからあとまかせたよ」

マグゴナガル 「わ、わかりましたっ!」

モーターヘッド 「ヒツヒツヒ、次の突撃でトドメをさしてからポッターを殺してやる
とするかっ!」

吉良吉影 「ッ………」

モーターヘッド 「とどめだっ死ねエーイ!!」

吉良吉影 「いや、死ぬのはお前の方だよ」

モーターヘッド 「なにつ」

カチツ

ドゴオオオオオオオン!!

吉良吉影「一発では死ななかつたか……………」

モーターヘッド「…………えっ…………何が…………ナニガ起こつたんだ—————!!」

吉良吉影「私のキラークイーン的能力は触れたものを爆弾に変える能力だ。さつきクワツフルにラツシユしたときキラークイーンはクワツフルを「爆弾」に変えていたのだよ」

モーターヘッド「ぐ、ぐぐぐ……………かなわね—————!!!」

吉良吉影「スタンドが消えたぞ……………さて、今頃本体の方にもダメージが来ているはずだな……………」

保健室

ジョン「アガガガガ……………まさか俺以外にもこんな能力を持っているやつがいたんだなんて……………ここは保健室で身を潜めて……………」

ロン「大丈夫かハリー?」

ハリー「ああ…吸魂鬼は来るクワツフルには変なバケモノがついてるしさんざだよ……………あのバケモノなんていうんだいハーマイオニー?」

ハーマイオニー「バケモノ……………? クワツフルには何もいなかったわよ? ねえ口

ン

ロン「コクリ」

ハリー「(後で校長先生に会ったら聞いてみよ)」

スプライト先生「ジョンハリソンっ！ ダンブルドア校長がお呼びですよっ！」

ジョン「(ギグリっ) え、俺なんかしましたか？」

スプラウト先生「さあ？ でもすぐ来るようにといっていましたよ」

ジョン「(嫌な予感しかしないぜ……) わかりましたよ……てゲッ！ お、あ、あなたは……」

吉良吉影「お前がああのスタンドの本体か……」

ジョン「スタンド？ なんのことやらさっぱりですがー」

吉良吉影「そうか、ならさよならだな。キラーク」

ジョン「ヒイイイ俺です俺ですよー。つい能力を手に入れたんで調子に乗ってしまっただけですよー！」

吉良吉影「反省……してるのかい？」

ジョン「してますしてますっ!! だから殺さないでー！」

吉良吉影「なら話してもらおうか……」

ジョン「なにを……ですか……？」

吉良吉影 「お前が能力を入手した経緯だよ。嘘偽りなく喋ってもらおうか」

ジョン 「え、えーとあれは確か三日前のときだったか……俺がクディツチ選手の名前を全員暗唱し終わり寝ようと寮に向かおうとしてるときだった……いきなり後ろから誰かに矢みたいなので突き刺されたんだっ。その後俺は意識を失ってたから何が起こったのかわからねー……」

吉良吉影 「まさかっこの世界にも矢がっ!? 誰が矢を所有しているのだっ??」

ジョン 「やれっモーターヘッドっ!!」

吉良吉影 「!?」

ジョン 「ギャハハハハハハハハハハ! 話に夢中になって俺がモーターヘッドを自分のところに戻していたのに気づかなかったのかー!!」

吉良吉影 「……………」

ジョン 「悪いが一カ月は寝たきりになってもらうぜー! くだばれっ!!」

吉良吉影 「……キラークイーン」

ジョン 「なっ、なにー! 防がれたー!」

吉良吉影 「お前のスタンドは媒体があることで真価を発揮できるスタンドだ……そんなスタンドが我がキラークイーンのパワーに勝てると思ってるのかね?」

ジョン 「ひ、ひいいいやめてちくれー!!」

しばっつ!!!

ジョン「ぶぎややああ!!」

ジョン・ハリソン全身骨折で再起不能!!!

吉良吉影「フウ、普通なら『始末』しているところだが再起不能で留めておいたぞ……殺してしまうとこの学校にいらなくなるからな……」

吉良吉影「……では私はダンブルドアに報告するとするか……」

スプラウト「(ガクガクブルブル)」

ロン「ん?何か物音がしたっぽいけど?」

ハリー「そんなことはどうでもいいっ!今はダンブルドアのところに行くのが先決じゃあないのかっ!」

ハーマイオニー「お、おう……」

吉良達のいなくなった保健室

???「……この矢の使い道はよく分かった……次はこの私が使うことにしよう。捨て駒……ご苦労だったな……オブリビエイド忘れよっ!」

???「これで私の計画がまた一歩進んだわけだな……完璧だっ!」

場所???

「我が君、あの『スタンド使い』がやられたそうです」

「そ……う……か……あの男の話は本当のようだな……次こそ、次こそこの俺様がこの世の頂点にたつのだっつ!! ……そのためにはあの目障りなポツターの血族を消さねばならん……すでに手は打った!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

↑To be continued……

第3話魔法使いとスタンド使いはひかれ合う

「我が君、お身体の調子はいかかでしょうか……？」

「ま……だ……完……全……に……馴染んではない……ようだな。少々……荒療法
だっただか……それより……その岩を早くもってこい……」

「は、ははあ！にしてこの気色が悪い岩は一体なんなのですかっ？」

「それはこの世界のものではない……人と岩が合体したものだ……いいから早く
もってこい……」

「はっはいっ！（お、重い……）」

「ふん……無能が……まあ良い、後ろに下がれ……レパセライトっ分離せよっ!!」
「ま、まぶしいっ!!」

「あが……あがが……ゴホツゴホツ！ここは……一体……？」

「ようこそ、我が世界へ……」

「なんだあテメー偉そうな口利きやがって、いい気になってんなテメー」

「……ペトリフィカス・トタルス」

「が…身体がうごかねえ…」

「私は君に敵意はないよ。君の名を教えてくださいな？」

「(な、なんだ…)この蛇に見透かされたかのようなオーラは…」片岡…安十郎だ」

「片岡安十郎か…少々呼びにくいな…これからはアンジエロと呼ばせてもらうよ」

アンジエロ「……………」

「早速だがアンジエロ、君に頼みがあるんだ。ここからちよつと離れたところにホグワーツという学校があるんだがそこにいるハリー・ポッターという男を殺してきてくれないか?…あとは殺してもなんでもしてくれても構わない…」

アンジエロ「なんで俺がテメエの命令に従わなきゃいけないんだっ!」

「俺はお前を即座に岩に戻すことができるのだぞ…もう二度は言わぬ、ハリー・ポッターを始末しろ……」

アンジエロ「ちつ、分かったぜ……」

グリフィンボール宿舍

ハリー「なぜか凄く欲しかったファイヤボールが届いているー!」

ロン「もうスリザリンとか楽勝だろwww」

ハーマイオニー「絶対怪しいよ!!シリウスがホグワーツが侵入してるのよっ!」

ロン「それ本編の時から思ってたけど関係くない？シリウスがそんな回りくどいことするはずないだろ」

ハーマイオニー「……………ともかくそれはマグゴナガル先生に預けるわよ」

ロン「なんだその間は」

吉良「？ あれは…例のガキどもか…何か騒々しいな…」

ハーマイオニー「あつ吉良先生つこれマグゴナガル先生に渡してください」

吉良「その筈、どうかしたのか？（くつどうしても彼女の「手」に目がいつてしまっ

…今は抑えなくては…）」

ハーマイオニー「あの、先生どうかしたんですか？」

吉良「…いや、なんでもないよ…それよりこの筈を預かればいいんだね？」

ハーマイオニー「はいっそうです。」

ロン「これでスリザリンに負けたらオメーのせいだからな」

ハリー「それよりもこのニュースみてよつマグルの破裂死体が学校の近くで見つかったみたいだよ」

吉良吉影「この世界、いやここら辺ではこんな事件がしょっちゅう起こってるのかい

？」

ハーマイオニー「例のあの人が倒されてからはそんなこと、いえでもあの大量殺人犯

シリウス・ブラックが脱走したのよ！」

ハリー「そうだ！あのシリウスがホグワーツへ向かってきてるんだ!!」

吉良吉影「そのシリウス……とかいう奴はそんなに危険なのか？」

ロン「そうだよ！あのヴォルデモードの一番部下（？）だったんだよ!!」

吉良吉影「？ でもそのヴォルデモードとやらは死んだんじやあないのか？」

ハーマイオニー「……それが……」

ハリー「僕がホグワーツに入学した始めの年にヴォルデモードが賢者の石を使って復活しようとしたんだっ！」

吉良吉影「……お話の途中すまないがそろそろ行かなくちやあいけないんだ。箒はマグゴナガル先生に渡しておくよ。」

ハリー「すみませんっ ちょっと喋り過ぎちゃいました!」

吉良吉影「(ああ、やっぱりガキの相手は疲れるな……それにしてもあの女の手、この生活に馴染んだら私の元に来てもらうことにしよう……) ……さてと教員室はどこだったか」

ホグワーツ周辺のどこか

アンジェロ「ここがホグワーツか……ムカつく場所だ!!みんな俺のスタンドでぶっ殺してやるぜっ!!」

魔法使いA「なにーあのキモいおっさんこの学校の人ー?」

魔法使いb「しらねーよーだけど関わらないほうがいいぜー」

魔法使いA「ぺっ 早く行こーぜー」

アンジェロ「……………」ザッザッザッ

魔法使いA「おいなんだよおっさんこつちにくるんじやね」がぶりブシャアアア

魔法使いA「ひ、ひいいいい人の顔を食いちぎったー!!」

アンジェロ「お前をさつき人の目の前でそいつの悪口言つてたよなーそれにさつき地面にツバ吐いたろ 何様のつもりだ? いい気になってんてめなー!!」

魔法使いA「な、なにをブゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

アンジェロ「いい気になってる奴は俺のスタンドを飲んでくたばりやがれっつ!!

……………さてと……………」

くアンジェロ作業中く

アンジェロ「なるべく失敗はしたくねーからな……………作業は 念入りにしなくちゃあなー」

ホグワーツ食堂

マグゴナガル「えー 夕食の前にいくつか皆様に言わなければいけないことがあります。まずは新聞を読んでいれば知っているとありますが最近学校の近くで謎の破裂死

体が見つかっています原因はまだわかりませんが皆さんもホグワーツの外に出る際は気をつけてください。またこの事件に伴い今月のホグズミード行きは中止となりました」

ホグワーツ生徒達「ええええええええ!!」

マドゴナガル「お静かにつ!しかしこの事件の犯人が見つかり次第ホグズミード行きは許可します」

ハリー「ドーセ僕ホグズミード行けないし?関係ないや」

ロン「ねえねえ 僕たちでその犯人捕まえない?」

ハーマイオニー「ダメよ!もし犯人がシリウスだったらどうするの!」

ハリー「そいつあ上等だな……日頃の鬱憤ばらしも兼ねてやらかそうじゃあねえか」

ロン「落ち着けハリー!」

ハーマイオニー「やれやれだわ……で、具体的にどうやって探すの?」

ロン「あの「忍びの地図」を使うんだよ!」

ハリー「ハーマイオニー」「な、なんだってー!!」

忍びの地図とはっホグワーツの中でのみ使える地図で秘密の場所や人の居場所などがわかる優れたものであるっ!!それをハリーはウィーズリー兄弟から貰っていたのだっっ!!

ロン「忍びの地図を使えば犯人の名前と居場所が分かるはずだよ！」

ハリー「確かに一理ある！あと声でかい！」

ハーマイオニー「でも問題は見つけた先よ。私たちじゃ勝てない相手だったらどうするの？」

ロン「逃げる？」

ハーマイオニー「逃げられない相手だったら？」

ロン「……………」

ハリー「とりあえず探さないには話が始まらないよっ！」

ロン「だねっ」

ハーマイオニー「……………」

教員室

吉良吉影「マグゴナガル先生はいるか？」

マグゴナガル「私ならここにいますが無か用ですか？」（ギロリ

吉良吉影「ハーマイオニーという女の子からこの箒を預かってくれと言われてね

……………」

マグゴナガル「分かりました。ところでここ最近起きてる不可解な事件について、何か知りませんか？」ギロリ

吉良吉影 「どういう意味だ…？私は何も知らないが……」

マグゴナガル 「いえ、もしかしたらクデイツチ大会のときみたいな現象かとも思いまして……」

吉良吉影 「……（くっつ、あそこでスタンドを出したのは間違いだったか…）情報が入り次第知らせるよ……それでは」

吉良吉影 「この事件もしかしたら「スタンド使い」の仕業かもしれないのか……もし私の平穩を乱すようなら……今度こそ「始末」してやる……」

一方のハリー達

ロン 「うーん、犯人っぽい名前の人はいないねー」

ハーマイオニー 「犯人っぽい名前って何よ……」

ガヤガヤワーワー

ハリー 「ねえ！あそこで何か騒ぎが起こってるみたいだよっ！」

ロン 「もしかして例の犯人っ!？」

ハーマイオニー 「ありえるわね」

魔法使いB 「おらー！テメーらこの女の命が惜しければ俺に近づくんじゃあねーぜっ
!!」

ハリー 「あれが例の犯人っ!？」

ハーマイオニー「名前は……ん？ダブってて読めないわっ!!」

ロン「なにか異常だぞこいつっ!!」

ハリー「もしかしてこいつ操られてるとか……?」

ロン「勘がいいなあハリー」

ハーマイオニー「もし本当に操られてるのなら私の覚えたての「究極」呪文が使えるわよ!」

ハリー「究極……呪文?」

ハーマイオニー「見れば分かるわよっ!!」ツカツカ

ロン「む、無茶をするんじゃないっ!」

ハーマイオニー「スペシァリス レベリオ（化けの皮はがれよ）……!」
魔法使いB「あつ、ガツ、体から離される……!!」

ロン「や、やったか?!」

ハリー「ロン、その言葉はフラグだ」

魔法使いB「う、うう……私は一体……?」

ロン「どうやらフラグじゃなかったようだね」（キラリ）

ハリー（無視）「……あのスライムみたいなのはなんだっ!」

ハーマイオニー「スライム?……そんなのどこにもないけど?」

ハリー「えっ」

???「……なんだあ？、この俺が見えてやがんのかテメー」

ハリー「いや見えてるも何も目の前にいるじゃん」

???「なんだオメエ学生のくせに年上に舐めた口聞いてんのか……？……いい気になつてんなテメエエエエエ!!お前の顔は覚えたぜ!!時が来たら殺してやるそれまで首を洗って待つてるんだな……」

ハリー「あ、下水道に落ちた」

ロン「さつきから君はなんのことを言ってるんだ？」

ハリー「ロンの方こそ！君にはあのスライムもどきが（？）見えないのか!？」

ロン「なんのこともだかサツパリだZE」

ハーマイオニー「なんでハリーにしか見えないんだろう……？ハリー、そのスライムもどき（？）はなにか言ってたの？」

ハリー「いやなんか時が来たら殺してやるとかなんとか……」

ハーマイオニー「それって殺害予告!! 見えない敵から狙われるなんて!」

ハリー「僕がいるじゃんか」

ハーマイオニー「ハリーだけじゃ力不足よ！もつと助っ人が欲しいわ……」

ロン「西の門にシリウス、東の門に謎の敵か……まづいね」

ハーマイオニー「そんな誰でも分かるわよっ」
ハリー「むむむ……」

ホグワーツの敷地のどこか

アンジェロ「これで『仕掛け』の方は完成だな……さあ殺しの始まりだ!!」
↓T o b e c o n t i n u e d ……

第4話スライムと矢と不審者と

教員室

吉良吉影 「フー、ここの2、3日は雨らしいな…」

フリットウツク 「よく知ってますねー 今日分の新聞はまだ見てないはずですが」

吉良吉影 「いやラジオでやってたからな…」

フリットウツク 「ラジオ？　ああマグルが使ってる四角くて黒いやつでしたっけ？」

吉良吉影 「まあ、そんなところだ…マグゴナガルはどこだ？彼女に呼ばれてここにきたのだが」

マグゴナガル 「私はここですよ」

フリットウツク 「ウィツ!? マグゴナガル先生驚かさないでくださいよ」

マグゴナガル 「悪かったわね、それと吉良さん、ダンブルドア先生が呼んでいましたよ」

吉良吉影 「…分かった。他には？」

マグゴナガル「他にはとは？」

吉良吉影「いや…私に何か用があって呼んだんじやあないのか？」

マグゴナガル「いえ、特にないですが…」

吉良吉影「…そうか。(はあ…やはり宿番とはいえ働き勤のときよりはるかに疲れる…
…：：：天気が今の私の心の中を表しているようだ…) 校長室か…」

マグゴナガル「フリットウツク先生つあなたよくあの得体の知れない奴としやべれる
わね」

フリットウツク「そうか？ そんな悪い人には見えなかつたけど」

マグゴナガル「あのクディツチ大会の時に見たでしょうあの変な技！」

フリットウツク「いやあの時寝てたwww」

マグゴナガル「あなた意外と神経図太いですね」

フリットウツク「？、とにかくKirasさんはそんな悪い人には見えませんでした
ぞー」

マグゴナガル「そうですか…(しかしダンブルドア校長とあんなに親しくしているの
は何か臭いますねえ…)」

ホグワーツ校庭

ロン「今日は雨か」

ハリー「クディッチの練習できなきそうだなー」

ハーマイオニー「男子は元気でいいわねー…って言うてる場合じゃないわよ！例のスライムに気を付けなくちゃ!!」

ロン「そういうやスライムの特徴聞いてなかったな、ハリーそのスライムってどんな外見してたん？」

ハリー「確か潰れたトマトみたいな顔で下半身がドロドロに溶けた感じで…」

ロン「とりあえず全体的に醜悪っていうのが分かったけど…ハーマイオニー知ってる？」

ハーマイオニー「いえ…そんな魔法生物聞いたこともないわ…」

ハリー「うーん…あつそうだっ！」

ロン「どうしたハリー？」

ハリー「魔法生物といえばあのお方がいるではありませんかっ！」

ハーマイオニー「…あつハグリッド!!」

ロン「ああーいきましたねー」

ハーマイオニー「ハグリッドなら何か知ってるんじゃないかな？」

ハリー「さすがはハーマイオニーだぜ」

ロン「そうと決まったら早速GOだぞ！」

Now loading…

ハグリッドの小屋

ハリー「ハグリッドいますかー？」

ハグリッド「ん？ハリーか、一体何の用だ？」

ハリー「ちよつと魔法生物について聞きたい事があるんだけどカクカクシカジカ…」

ハグリッド「…俺はそんな生き物しらんなあ何かの見間違えかも知れんぞ例えば水に

映った自分の顔とか」

ハリー「なんでハグリッドそんな毒舌なの（T・T）」

ハーマイオニー「やっぱりただの見間違えなんじゃないの？」

ハリー「じゃあ、あの声は一体…てあつ！こいつのことだよ！」

ハグリッド「どこ？」

ハリー「ほらほらその水道管の近くにいる奴だよ!!」

ハグリッド「はて、うちに水道管なんてなかったはずだが…？」

ハリー「避けてハグリッドっ!!」

アクアネットワークス「シャアッ!!」バキッ

ハグリッド「お、俺の机のあしがひとりでに折れた…!？」

ハリー「いやいや完璧にスライムが攻撃してきたよ!!」

アクアネックレス「チツ、あともう少しであの大男の喉笛をかつ切れたというのに……」
ロン「どうやらそいつが見えてるのはハリーだけのようだね……」

ハーマイオニー「ハリー!! そいつが私たちの方にきたら教えてっ!!」

ハリー「了解!!」

アクアネックレス「お前が前に舐めた口聞いてくれたガキか……! お前、「アイツ」が
言つてた例のガキといっしょだな? そうか……ならば貴様を最初に血祭りにあげておく
ことにするぜ!!」

ハリー「こいつ僕を最初に殺すっほい!!」

ハーマイオニー「じゃあハリーは逃げて!!」

ハリー「でもそうしたら今度はハーマイオニー達がやばくなるよっ」

アンジエロ「ゴチャゴチャうるせー!!」 シャツ

ハグリッド「グハツ……!!」

ハーマイオニー「ハグリッド!!」

ハリー「き、貴様……!! よくもハグリッドを!!」 ブンツ

アンジエロ「グゲツ!! なんだあ、やはりてめえもスタンド使いか!」

ハリー「スタンド使い? なんだそれ」

アンジエロ「しらを切るつもりか? まあいい……俺はこの雨を待っていたんだ!! 俺がよ

り自由に動けるこの時をな!!それにまだ奥手を残しているんだぜ…」

ハリー「奥の手?なんのことだ!?お前はヴォルデモートと関係あるのか!?!」

アンジェロ「クククツ…さあな…」

ロン「よくわからないけど早くトドメを刺すんだ!!」

ハグリッド「ウオリヤアアアアー…」バキツ!

ハーマイオニー「!!?!」

アンジェロ「どこ見てんだ?マヌケ… じゃあなマヌケ共!!」

ハリー「あつ、穴に吸い込まれてった…」

ロン「何してるんだよハグリッド!?!」

ハグリッド「い、いやわしもなんか手柄が…。それよりなんでこんなところに穴が空

いてるんだ?」

ロン「ネズミがあけたとか?」

ハリー「…もしかしてアイツが開けたとか?」

ハーマイオニー「だとしたらかなり不味いわね…」

ロン「ハグリッド「???」」

ハーマイオニー「もしスライムが他のところに同じような穴を開けてたとしたらどう

なると思う?」

ロン「つまり敷地内を自由に移動できるってこと？」

ハリー「みんなが危ない!!早く助けに行かないと！」

ロン「どこにいるのかもわからないのにどうやって!？」

ハリー「いや忍びの地図あるじゃん」

ロン「……」

ハーマイオニー「いいから早く忍びの地図だしてっ」

ハリー「えーっと、このアクア・ネックレスっていうのがスライムのことかな？」

ロン「キング・クリムゾンとかゴールドエクスペリエンスとかの方がかつこいいのに……」

ハリー（無視）「…なんか湖の方に向かってるけど…」

ハーマイオニー「??なんで湖に行くんだろ？」

ハグリッド「とりあえず追った方がいいんじゃないかね？」

ハリー「確かに現地に行つて見ないと分からないもんね。ではさっそくスライム、もといアクア・ネックレスをせいばつしに出かける。後に続け!ロン、ハーマイオニー」

ハーマイオニー「いや、もっと慎重に行動しないと…」

ハリー「臆病者はついてこなくてもよいっ!ロン、早くしろっ」

???

「首尾は…どうなっている？」

「ははあ、アンジェロのやつがポッター達と接触した模様です。」

「そうか…上手くやれよアンジェロ…しかしこの時点でもうネタの使い回しとは…

つづくこの世界を描いている神も能がないものだ…」

「同感ですつ」(キリッ

Now loading…

湖

ロン「ハア ハア、ハリー箒の速度速すぎ…」

ハリー「いやあワリイなあ」

ハーマイオニー「ハリー、スライムがどこにいるか分かる？」

ハリー「うーん、水の中だから見にくいけど…」

ゴボゴボゴボゴボ

ハーマイオニー「今水が蠢いたっ!? ハリー水から離れてっ!」

ズシャッ

ハリー「ゴフツ…!!」

ロン「ハ、ハリー!!!」

ハーマイオニー「ま、まさかこの『湖』そのものがスライムになってるってこと!?!」
ギガントアクア・ネックレス「ゴフウウウウウ…試して見た甲斐があったな。この俺、
アクア・ネックレスは水と同化できる能力だ…だから理論上海や湖とも同化できるわ
けだ…しかしここまでのパワーとはな」

ロン「俺、逃げてでもいいかな…?」

ギガントアクア・ネックレス「さあてメエらを血祭りにあげてやるぜえ!!」

ロン「まってみんな!!!こいつさつき湖と同化したって言ってたけどようは水で出来て
るってことじゃない?」

ハーマイオニー「そんなこと関係ないっ…なるほど!ロン、冴えてるわね!」

ハリー「僕は最初から気づいてたんだけど…」

ロン ハーマイオニー ハリー「インパービラス(防水せよ)!!」

ギガントアクア・ネックレス「なにい!奴らに触れられない…!弾かれてしまう!!」

ロン「これでアイツの攻撃は受けない…!」

ハーマイオニー「でもこのままじゃ防戦一方よ!どうすれば…」

ハリー「こつちも攻撃するんだよ!ステューピファイ麻痺せよ!」

ギガントアクア・ネックレス「グハハハ! きかねえなあ!」

ロン「まじか…」

アンジエロ「しかし、ハアハア…大量の水と同化すると体力をかなり消耗するな…体の動きが鈍く…体が動かない!? また体が石になっているとでもいうのか…!? ウガガガガ…」

ハリー「あれ? アクア・ネットワークスが段々溶けて行くよ?」

ロン「変身時間がきたとか?」

ハーマイオニー「もしかして逃げたんじやない!! ハリー、忍びの地図!」

ハリー「あれ? 地図から消えてるけど…?」

ロン「無事解決したのか…?」

ハーマイオニー「かも…」

「時間切れだな…」

「他に手は打ちますか?」

「いや、よい ひとまずは放置しておけ…。他にも奴を憎む奴はいる…」

「…!! この私以外に『能力』をもつ者がいたのか…? まあよい俺の能力で既にデー

々は採っている…対策は整っている…」

吉良吉影「私の出番はなかったようだな…いつそ全話こうしてくれ…」

第5話ACIDMAN①

木が鬱蒼と生い茂る暗い森の中、ホグワーツの制服に身を包んだ一人の男が辺りを徘徊していた。

男はある「探し物」をしていた。

自らの戦力になるであろう素材を…

「やっと見つけた。こういうものは必要な時には中々見つからないものだ…」

そう呟きながら男が見つめていたのはネズミの巣穴だった。そこで男は三本指で黒いローブを着た単眼の「スタンド」を出す。

最近、自分に発現したこの奇妙な分身を彼はACIDMANと名づけていた。

このスタンドは他のスタンドに比べてパワーもスピードもはるかに劣るがある特殊な能力をもつ。

その能力が自分の求めているものに近かったためこの能力を気に入っていた。

そのスタンドで男はネズミの巣穴を破壊する、すると中からネズミが数匹飛び出す、まるでこれから訪れる死から逃れようと必死に逃げるそれらに彼は短剣を突き刺す。

本当なら死の呪文を使ったがさすがにアズカバンに投獄される危険を冒すつ

もりはなかった。「デッド・レイズ（死者蘇生）…」と男が呟くと死んだはずのネズミが糸に吊られたようなぎこちない姿で立ち上がった、しかし立ち上ろうとした側から皮や肉が段々と削ぎ落ちて行く。それがこの能力の特徴で復活させた動物は肉や皮が削ぎ落ちたゾンビのような状態になってしまうのだ。もつとも蘇生といっても意識はなく、ただの操り人形でありこの点ではどこかの冥王よりかははるかに優しい能力と言える。しかしこの能力は彼が求めていたものとは少し違っていた。「行けっ…」そして男はネズミたちに、今や彼の傀儡となったものに命令を下す。傀儡達に命じたのはハリ・ポッターの搜索と内状を探るためだ。ハリ・ポッターはこれまで賢者の石を悪魔の手から死守して見せたりあの「秘密の部屋」のバジリスクをも打ち倒したのだ。しかし実際は言われるほどすぐくないのではないか…彼はハリーと食住を共にしているが彼が活躍しているところをクディッチ以外で見ることがなかった、そんな情報が乏しい状況でハリーに挑み亡き者にすることは計算高い彼にとつたは避けたいことだった。しかし矢の実験の一環で作ったモーターヘッドや他のスタンド使いと戦っているところを見て彼は奴がスタンドが使えないと確信していた、かといって手を抜くことはしない。「行け、オルトロス、奴を屠るのだ」彼は傍に待機していた頭がつなぎ合わされた犬に命令を下す。犬は吠えながら森の奥へ去っていった。「ふふ、この三年間ホグワーツにいた甲斐があつた…」彼は薄く笑いながら森の奥へと消えていった……

その頃吉良は守衛室でつかの間の休息を猫草と過ごしていた。「ニヤオニヤオ…」猫草が吉良の持つているねこじやらしにじやれてる様子をみて吉良はこの世界では中々味わえなかつた充足感を得ることができた。「小さい頃はペット禁止だったからな…なかなか新鮮だ…」特に話しかける相手もないので猫草に話しかけるその時守衛室の前を獣のような息遣いを通り過ぎようとしていた。猫草がゴロゴロと警戒音をならすのをなだめ吉良は興味本位で音の正体を探ろうとした。「やはりただの犬か…まあ当然だが」黒い毛並みの大柄な犬だ。しかしその犬が普通の状態でないことは一目でわかる、普通のよりふた回りほど大きくその割に異様なほどやせこけていた「まあ、私には関係のないことだ…」特に関わる気のない吉良は猫草の世話に戻る。「あと数時間でダンブルドアの所に行かなくちゃあ行けないのか…」この前の世界よりかは平穩を謳歌できるこの世界において最も厄介なのはあのジジイ、もといダンブルドアだ。吉良は夜の11時から最低8時間、つまり朝の7時位までは寝る生活を続けていたため朝5時に叩き起こされ、魔法やこの世界のことを色々教えてもらえるのはありがたくはあつたがかなり苦痛だつた。「まだだ…あともう少し抑えなければ…」本来ならば欲望が暴発してもおかしくない精神状態であつたが前の世界で耐えるという事を十分学んだため正気を保つことができた。そんなことを考えていると、猫草が吉良の手から離れて隅の方には何かを見つけたように唸っていた。「ん？」吉良が猫草の視線を辿ると所々皮が剥

がれて落ちているネズミがいた。「あれは……魔法使いやマグルが見ればただの、多少皮が剥が落ちたネズミに見えるかもしれないがスタンド使いである吉良吉影にはあれが何が分かっていった。「（あれはスタンド……か？もしかしたら能力で動かされている「物」ないしは「死体」かもしれないな、確か親父に矢を渡した「魔女」がそんな能力だったと親父がいていたな……）」吉良の言っている魔女とはあの悪の帝王にスタンドの存在を教えたエンヤ婆である。吉良の父である吉良吉廣はエンヤ婆に矢を託されており、その際に少しだけエンヤ婆のスタンドを見たことがあった。「だとしたらかなり厄介な能力だが……あちらに敵意があるかどうかだが……そもそも私がスタンド使いだということを知っているのか……？」キラークイーンを出して相手の反応を探るといふ手をかんがえたが、その行為を敵対行動とと取られてしまうのは面倒であったため、ためらわれた。またネズミの方も行動を不審に思ったのか吉良の方を見つめたまま動かない。「くっ、こんな奴キラークイーンで爆破すれば終わりだというのに……」吉良は顔を歪ませる。そう、たとえここで戦闘になったとしてもキラークイーンなのだが前の経験のせいかわり未知の敵に迂闊に手を出せなくなってしまう。そんな時……「フニャアア!!」こちらをじつと睨んでくるネズミに異様な気配を感じたのか、それともただ単にご主人様が自分に構ってくれなくて暇だったのか空気をネズミに向かって発射した！幸いネズミが避けられるスピードと目視できる大きさの空気弾だったため、ネズミは軽々と避

けられた。「くつ、ストレイキャットの奴余計なことを……」心の中で毒吐きながらも内心では攻撃する口実が出来ホツとしていた。「キラークイーン!!」ネズミにはキラークイーンが見えるようで濁った目に警戒の色を宿す。「キラークイーン、こいつを捕まえて爆弾に変えろ!!」キラークイーンがネズミをつまもうとするがネズミもすばしっこく中々捕まらない。しかし「やれつ、ストレイキャット!!」猫草がネズミを閉じ込めんとかつて早人に撃つたような縄状の空気弾を発射する、「ギギツ!」空気弾に囚われたネズミはもがくが外れない。「ふうー、とりあえずこれで終わりか……」キラークイーンが空気弾を爆弾に変え、爆発させる。「さて、これで終わりだといいいんだが……」これから来るであろう敵襲にため息をついた。

「……む、0—9号が消えた……?」男は少し驚いた。別に作った傀儡ネズミはたくさんいるため損失はほとんど無いのだが、「俺の能力で作った傀儡はどれだけ潰そうが肉片になるまで消えぬはずだが……」男と傀儡たちの間には多少の精神状の繋がりがああり、意識を傀儡側に移すこともできる。しかしその能力をハリー捜索のために使っていたため吉良側の様子を察知することは出来なかった。「……まさかあの新任教師か……?」男は吉良吉影を思い浮かべた。吉良は彼が矢の実験で作ったスタンド使い、ジョン・ハリソンを退治する際キラークイーンをだしたのだがその現場を彼に見られてしまっていた。

「まあ俺がスタンド使いだと気づいているのならばあちらから何か仕掛けて来るはずだが、気づいていないと考えるのが妥当か……」男は思案し吉良に追撃を加えることを断念する。「ならば、ポッターたちの様子を見ることにするか……」彼は再びハリー達のもとに待機させておいたネズミに意識を繋ぐ……

その頃、ハリー達は盛大に疲れていた。「あ、あ、くくく説教長すぎだろ……」アンジェロとの戦闘の後、マグゴナガルに外出禁止令を破ったことを諫められた上、グリフィンドールを40点減点されたのだった。「ロンが誘ったから……」「いやいやそもそもハリーがスライムを挑発しなかったら……」「2人共黙る！」ゴツ お互いに責任転嫁しようとするお馬鹿2人組をハーマイオニーがゲンコツを下し黙らせる。「それよりこのことダンプルドア校長に報告する?」「いや、いや」ハリーはダンプルドアに信じてもらえないと思ひ反対する。「じゃあ今日はお休み。」「うん」3人は男子寮と女子寮に帰る。「ふー、疲れた……」ハリーは自分のベッドに腰を下ろすがいつもと周りの雰囲気が違うことに気付く。「あれ、ディーン・トーマスは?」「同級生がベッドにいないことにふと疑問を抱くが、「ヌギヤアアアア!!」ロンの素つ頓狂な悲鳴によって遮られる。「僕のスキヤバズが!!いない!!」「いつものことじゃ無い?」ハリーが言う。「いや、昼ならともかく夜居なくなるなんて!!」ロンは相当ご乱心のようなのである。「もう我慢ならんっ!探しに行つて来る!」そう言う足音を響かせながら部屋を出て行った。何事かと明か

りをつけ始めた他の寮生を見ながら「少しは静かに歩けよ……」と思ひながらハリーはとこについた……。

「こゝ、これは……！」男はターゲットである3人組のうちのロンが単独行動していることに予想外の事態に喜びを隠せなかった。「クツクツク、バカ丸出しが……ぶつちやけこいつは殺さなくても良いのだが……」誰にぶつちやけているのかはわからないが1人笑みを浮かべながら呟く。「こいつは自分のネズミを探しているのか？ならばあげるよ、僕のでよかつたらね……」彼は笑みを歪め探索用のネズミをロンのもとに向かわせ、「……さあ、晩御飯の時間だ……」近くの森に待機させておいたオルトロスを、ロン抹殺に向かわせる……。一方ロンは目を皿のようにしながらスキヤバーズをさがしていた「いない！いないぞ！」深夜1時だというのに声を張り上げながら談話室をうろついていると、「ギ、ギギギ……」死にかけのネズミのような声が聞こえた。ロンが声の方を向くとボロ雑巾を洗濯機に放り込んだようなボロボロのネズミがよろめくように立っていた。「君、僕のスキヤバーズがどこにいるか知っているかい？」返つてこないであろう問いをネズミに話しかけるとネズミはついて来いともいうように廊下を走り始めた。「スキヤバーズの居場所を知ってるんだね！」一抹の期待を込めながらネズミの後を歩いて行く。暗い廊下を進んで行くと行き止まりに止まった。「あれ、ここにスキヤバーズがいるのか？」いまだに何も疑わずにスキヤバーズを探そうと辺りを見渡すと、「グガ

ルウウウ……」犬の掠れた唸り声のようなものがかすかに聞こえた。「!?」慌てて声の方を振り返ると、首元をツギハギでつなぎ合わされたドーベルマンのようなモノが明らかに敵意むき出しでこちらを唸っていた。「え、え、何こいつ!?」いきなり現れた異形の物にうろたえるとドーベルマンが笑い「やはり滑稽だなロン・ウィーズリーよ……だが光榮に思うがいい今からお前はこのオルトロスの餌食になるのだっ！」掠れた声でそういうとロンに向かって牙をむき出しにした!「ひえええ!冗談じゃねえ!」杖すら持つてないいまロンには逃げる以外策はない「くつくそ!早く看守室の方に向かわないと……!」寮から一番近い部屋、吉良の方にトラブルを持ち込もうとすると、「あ、行き止まりだ……!」
「ロン大ピンチ!」くつそー、グリフィンドールを減点されるは変な犬に追いかけるのは今年のロンは厄年か!?」どこぞの策士のようなセリフを吐きながら逃げ道を探すが「クツクツク、逃げ道を探しているようだが生憎出口はないぞ。強いてゆうなら……この俺の胃袋だっ!!」あ、これヤバイ。やっと自分の置かれている状況の深刻さを理解したロンが青ざめた。すると……オルトロスの後ろから骨ばった手が伸びていることに気付く。「?」ロンの視線に疑問をもったオルトロスが後ろを振り向くと、ヒゲだらけの骸骨のような男が立っており、オルトロスを掴んでいない方の腕でオルトロスの頭の1つを突き刺した。「ナツ、ガツ貴様ハアアア!!」頭を貫かれたオルトロスが呻き、無事な方の頭で男に噛み付こうとするが、男は更に力を込め、牙をそらす。「今だ!」ロンは両

者が取っ組み合っている場から離脱する。「(ヤバイ!!これは絶対ヤバイツツ!!)」ロンはオルトロスにも驚いていたが男の方がヤバイと確信していた。「(アイツ、シリウス、シリウス・ブラックじゃん!!)」今朝新聞で見た顔と瓜二つだった。何より去り際に聞こえた「シリウス・ブラック、ナゼ貴様がここにいるウウウ!」ああ、もう確実にシリウスだこれ…察まで命からがら逃げた後、ベッドに飛び込み目を閉じた……。

男はオルトロスがやられたことに驚愕し、かつシリウス・ブラックに邪魔されたことに憤っていた。「クソツ、クソツ!後もう少しだったというのに!」男は舌打ちし、地団駄を踏むが、「…まあいい、獲物がロンだったからな。次は全力を出すか…」自分の所有する中で最も強力であろう傀儡を見ながら呟く。「そろそろ朝か、早く戻らなくては、グリフィン・ドール棟へ…!」To be continued…↓

第6話ACIDMAN②

夜中の4時、男はいつもの夢にうなされていた。

「ウツ、グツやめろお父さん行かないでくれ…頼む…」彼の脳内には床に倒れ動かなくなった父親と緑の閃光がチラついていた。

今まで何でも見てきた忌々しい光景、そんな悪夢にうなされていた時、

「おーい朝だぞー デイーーーン!!!」

腹部に強烈な衝撃を受け、名前を呼ばれた男 デイーントーマスは目を覚ます。

「早くしないと朝食に遅れるぞー!!」

声の主、ハリーポッターに起こされ目をこすりながら体を起こす。「ゲホツ…分かったから普通に起こしてくれないか？」キョトンとしているハリーを尻目にベットから出て着替え始める。「なんだこいつ… 今日この俺に殺されるというのに… 決心が鈍るだろ…」

ハリーを殺し、その魔力を我が物にする計画を取りやめたくなくなるが、

「(もう後には引けない!! 小さいとはいえたくさんの命を奪ってきた… 今更やめれるか!)」

「(しかも俺には切り札がある! 負けるはずもない!)」

もう後には引けないという思いと切り札という自信に押され決心を固める。

「よし、今日、今日こそ己が**大望**が成就される時だっ!」

そして貴様のすばらしき命日だ、ハリー・ポッター

守衛室

「フーーーーー、眠い……………」

あの戦闘(?)の後、敵襲を警戒してあまり満足に眠れなかった吉良であった。

「なぜこの世界でもスタンド使いを警戒して満足に眠れない生活を過ごさなくちやあいけないんだ!」思わず怒鳴りたくなる、いや怒鳴ったが「とりあえず目下の問題はあのスタンド使いを拷問もといスタンド使いと話し合うか……場合によっては「始末」しなくちやいけなくなるのか……」殺人鬼としての顔を見せる吉良。

「行くぞ、ストレイ・キャット」「ミヤオミヤオッ!」かわいいお供を連れて部屋を出発しようとするが、

「……念のため……キラークイーン!」「……………」ヒョイ カパツ スポツ

ストレイキャットをキラークイーンの内部に収納しておく。

「フーーーー」ため息をつきながら重い腰を上げる吉良、

「さて、ダンブルドア達にバレなければ良いが……」

一抹の不安を口にしながら部屋を出る吉良であった……

今宵殺人鬼が始動する……

授業終了まで時は「加速」する……

「いやー疲れたねー」疲れた腕を伸ばしながらロンが呟く、ハリーもそれに同意とばかりに頷いたがハーマイオニーだけは様子が違った、というか瀕死寸前だった。

「!? え、どうしたハーマイオニー」あまりの疲労ぶりに心配して声をかける。「やれやれ、あんたぶつ飛んでるわ」

「……え?」

会話が成立しない模様です。

「あーロン、ハーマイオニーの介抱は君に任せるよ。僕はちよつとトイレに……」「おいつ!?」2人を置いててそそくさとトイレに逃げ込むハリーだったが、

「お、ポッターじゃん!!」「どこへいくんだあ?」「ここは通さんつ!!」「フオーイー人とデブ2人が行く手を遮る。」

「あつ全然出番ない3人組」

「やめろー！そのことを言うな!!」

出番なし3人組の1人、フォイもといマルフォイが怒りに顔を染め(?)怒鳴る。「だつて1話以降君たち出てないじゃん」「……」ぐうの音も出ないメタ発言をされ黙り込むフォイ達であつたが「うるせー、ここでお前を潰して俺がこのssの主人公になるだー!」そう言い放ち飛び蹴りをかまそうとするフォイであつたが、

「…当て身」その声とともにフォイの体が崩れ落ちる。会心の一撃!

「ちよつとどいてくれないかいクラブ、ゴイル。僕はハリーに用があるんだ。」

名前を呼ばれた出番なし2人組クラブとゴイルは気絶した自分のボスを抱えて逃げていった。「ありがとデーン、あのままでまた無駄な尺が出来るどころだつたよ。」

とりあえずメタ発言を無視して「ハリー、君に見て欲しいものがあるんだよ」本題に移る。「見て欲しいものつてなに?」首をかしげるハリーに「見れば分かるよ、君が喜びそうなものだ」意味深な笑みを浮かながら歩き始める。ハリーも無言でついて行くこと5分後、「…倉庫?」見る限り古びた薬瓶が並ぶ小さい倉庫だつた。

「さあこれで誰も来ないな…計画どおりだ」「!?」いつもは見せないその歪んだ笑みにようやくデーンの目的が邪なものであると気づいたその時ハリーの頭上に影がかかり、

ドシンッ ガラガラ……

「……え？」すんでのところで回避したハリーはそこに立つ異形の物をみて絶句する。その異形の物は豚のような鼻に一对の角、そして紫の熊のような生き物だった。しかも全身ツギハギがありところどころが腐っていた。

「おつ 色んな珍しいものを見てきた君でもこいつの姿には驚いたようだね。こいつは俺がバルザックつて名付けた、俺だけの兵隊さ」特に驚いた様子もなく淡々と答えるデインに「僕を……どうするつもりだっ!?」思わず叫ぶ

「ん? 決まりきったことを聞くねえ、君の命をもらうためさ」

「まさか君はヴォルデモートの……自分の命を狙っている宿敵の名をあげるが「ふつくだらん、俺は例のあの人の復活にはは何の興味もない」一笑に付された。

「??」ますますわけがわからなくハリーだったがバルザックと呼ばれた怪物が腕を振り下ろしてきたため考えることをやめた。

「ツ……!!!」すんでのところで回避しポケットから杖を取りだし、

「ステューピファイ（麻痺せよ）！」しかしバルザックには効かなかった!

「クツ……!」やみくもに辺りの薬瓶を投げつけるもバルザックは怯む気配をみせない。

「あつヤバイ、追い詰められた……」ハリー・ポッターは壁際に追い詰められた!

「ヒイヒイイ! こうなったら殺人鬼でも誰でもいいから助けてくれー!」目をつぶり叫

ぶが誰も来るはずがない。

「ハツハツハ、ここには誰も来やしないよ、英雄らしく大人しく死になっ！」ハリーは自分の死を覚悟して目をつぶった……

…私を呼んだか……？

いつまでたつても攻撃が来ないため、ハリーは恐る恐る目を開けるとそこにはピンクの猫のような筋肉モリモリの化け物がバルザックを吹き飛ばす光景が広がっていた。

「な、貴様は新任教師の吉良吉影かっ！」

思わぬ邪魔が入ったことに苛立ちに顔を歪めるデイーンを尻目にハリーは吉良に感謝の気持ちを述べる。

「助けてくれて有難うございます！とところであの猫の化け物は……？」吉良の後ろにいるキラークイーンを指差す。「え？」「いや、今吉良さんの後ろにいる怪物ですって」

「……」

「…何のことを言ってるのか分からないな坊や、私の後ろには何もいないよ？」「……」
「信用していない小僧！」

吉良はキラークイーンを見られたことになんか焦っていた。「（このクソガキ、スタンド使いなのか!?だがこいつのスタンドは……見せていないのか……?）」とか色々かんがえてると、

「おいつ、俺を置いて話を進めるな！」デイーンが怒鳴ると同時にバルザックが向かってくる。

「やれやれ…」吉良がため息をつきながらよけると、さっきまで吉良がいたところにバルザックの拳が突き刺さっていた。

「チツ、素早い奴め」デイーンが舌打ちをし自分のスタンドを出す。

「お前が昨日のネズミのスタンド使いか…？色々聞きたいことはあるがとりあえず始末させてもらうぞ」

そう言いながらデイーンの元へ近づいて行く。

「やつ、やめろ！俺に近づくんじゃねー！」懇願するデイーンに吉良は

「ダメダメダメダメ！君は話を聞いた後で死ななきゃいけないんだ。死ぬことくらい覚悟してるだろお？」無情に告げる。

しかしデイーンは懇願している表情を一変させ、「ハアハア…ハハハハ！バカめ、俺の演技に騙されやがってお前の後ろにバルザックが拳を振り上げている。動くんじゃねー！」吉良に怒鳴り、杖を向ける。

「フー、面倒だな…」またため息をつき歩き始める。

「なめるなー！やれっ！バルザックっ！」バルザックに拳を振り下ろさせるが、「キラークイーン」「シバツ!!」

かつて広瀬康一のエコーズ a c t 3 のラッシュを片手で防いだ反射速度でバルザツクの腹にパンチを入れる。

「クッ！」デインは歯ぎしりする。こんなところで自分の大望が消されるわけにはいかない。思わず涙が出そうになるがそれをこらえ、

「俺のっ、ありったけを　ぶつけてやる!!ゆけー！傀儡どもー！！」すべての傀儡に命令を下す、

すると倉庫の隙間という隙間からネズミや様々な小動物が湧き出してきた。

「さあ！ネズミ共にはらわたを食い尽くされて死ねー！！」

T o b e c o n t i n u e d …… ↓

第7話 新たな歪み

歪みは新たな歪みを生み出す……

「ウシヤアアアアア!!」「Nooooooooo!」床を埋め尽くすネズミの群れにハリーは小便がちびりそうになっていた。

「チッ!」吉良は恐怖で動けないハリーを抱え壇上に飛び乗る、そこから自然な動きで壇上にあつた瓶を掴み、デイーンの方へ投げつける、しかし「アホっ!」ネズミの群れが蠢き立ち瓶を包み込み爆発させる。

「くっ、これでは着火点火弾も意味がないか……!」

吉良が先ほど放つた瓶は接触弾にしていたためネズミに触れた時点で爆発した。し

かして着火点火弾にしたところで相手に届かなければ何の効果もないのだ。

「(それに爆弾が1つしか作れないからな)」そこで吉良は「もうひとつの手」を打つ。

デインはネズミが溢れかえる倉庫内をみて

「さあもう降参か? 念仏ならセルフサービスでやってくれよ、俺は無心論者なんぞでな。」
負けフラグのような台詞をはく、完全に勝利を確信していた。

キュラキュラ…

「ぬっ!」

デインは聴きなれぬキヤタピラ音に飛び退くがすでに遅い

ドドドド「シアーハートアタックに……」ドドドド

「弱点」はない

キュラキュラ…

キヤタピラを装着した爆弾戦車がデインの手を吹き飛ばした

「うっ　ぐああああ!」

左に激痛が走り思わずうずくまろうとするが爆弾戦車がそれを許さない。

「コッチヲ見ロー!」

再び追撃を加えんとディーンに向かって行く

「くっ!」ディーンはすんでのところかわす。爆弾戦車はそのままそばに置いてあった燭台にぶつかつた

「ぐはっ な、なんだこいつは…お前は能力を2つ持っているのか!」

血を吐きながら叫ぶディーン

戸惑うのも当然だ。いきなり戦車のような物体が自分の腕をぶち破りながら突き抜けていったのだから

「フウー、まあ答える必要はないな。君はこのまま私の「シアーハートアタック」に始末されるのだ」(勝利確信モード☆)

吉良はシアーハートアタックが敵の辺りを蹂躪している様子を見て薄笑いを浮かべていた。

「(えっ ちよっ 始末ってことはディーンは殺されちゃうの!?)」

自分の隣に佇む男から「始末」という言葉が出てきたことにより驚愕していた。

「(そんなさざらりと「始末」するなんて口に出せるものなのか!?!)そしてこの人の顔、マジでやる気だ…この人からやると言ったらやる…「凄み」があるっ)」

ハリーは親友が殺されそうになっている状況に一手を打つ

「ハアハア……くそっしつこいなこいつ!」「コッチヲ見ロー」

デインはしつこく追いかけてくる爆弾戦車に疲れ果てていた。

しかしそんな中デインはニヤリと笑い

「だがなあ、こいつの「弱点」モロバレなんだよなあACIDMAN!!その燭台をネズミたちの群れに投げろっ!」

デインのスタンドが燭台を掴み傀儡ネズミの群れに投げつける。するとネズミの群れは瞬く間に燃え始めた。

「ギッ、コッチヲ見ロー!」するとシアーハートアタックが向きを変え燃えているネズミの群れに突っ込んで行った

「ふっ これであの爆弾戦車はどこかにやれたなっ」

デインは手の痛みをこらえながら一息つく

そう!このデインという少年、本編であまり活躍がなかっただけでとても頭が切れる子なのだ!本編での活躍がなかったぶんここで大金星をあげるぞっ!

「むっ!」吉良はシアーハートアタックがネズミの群れに突っ込んだことに驚く

「シアーハートアタックは標的を狙うのでなかったのか……あいつが放った炎に突っ込

んで行ったところを見ると熱源に突っ込む性質を持っていたのか……」

吉良はシアーハートアタックを使ったことは何回かあるが使用しているときは常に遠くに離れていたためどういう行動をするか分からなかった

「おっと油断はいけないぜ 吉良さんよー!」

吉良の油断している隙を狙いすかさずバルザックの拳が吉良めがけて飛んでくる

ガシツ

キラークイーンはその拳を片手で受け止めていた

「なっ何——片手でバルザックの拳を受け止めるだ?!」

デインが思わず叫んでしまう

「フウー、この程度のスピード見切れないはずがないだろ。もし私を倒すならスタープラチナくらいの素早さのものを持ってくるんだな」

肩をすくめながら生徒をなだめるかのように言う。

吉良スタンド能力の差は歴然であった

これはしようがない事だ。吉良はスタープラチナやクレイジーダイヤモンドなどといったスタンド使い達と戦ってきた。そんな吉良に最近発現したばかりでまだスタンドを使いこなせていないデインが敵うはずがなかった

「それにもうそろそろ君のネズミ達も燃え尽きそうだぞ」

吉良が追い打ちをかけるように言う

床一面にいたネズミ達はシアーハートアタックに爆破されたかそのまま燃え尽きたかにより燃えかすとなって地面に散らばっていた

「くっ、グウウウウ……」

自分の負けを確信したデインンは負傷と絶望でその場に倒れこむ

「なかなか偉いじゃあないか小僧、死ぬ前に騒がれると精神衛生上イラつときてよくな
いからなあ」

そう言いながら死に体のデインンに近づく

そしてキラークイーンを出し、デインンに触れようとするが

「ちよつとまったー……!!」

ハリーの声が吉良を止める

「どうしたんだ？ハリー」

近づいてくるハリーを見て首をかしげる吉良

「いやいや！殺しちゃだめだよ！僕の大事な友達なのに！」

キラークイーンに対する恐怖からか少し震えながらも吉良に怒鳴る

「だが君を殺そうとしたんで、今始末しとかなきゃまたこうなるかもしれないだろ？」

始末することが至極当然のように答える吉良、今まで48人の女性を自分の快樂のため殺した殺人鬼である。そんな吉良は自分の命を狙った人間を生きてかえすはずがなかった

「そうだつ…俺をこのまま死なせろ…! どうせ今後俺の願いが叶うはずがない……」
顔を少し上げ、血を吐きながらデイーンはうめくように言う

「そもそもなんでデイーンは僕の命を狙おうとしたの?」

先程から気になっていた疑問を問うハリー

「それは……俺の父親を生き返らせるためだ……!」

デイーンは泣き声混じりの声で答えるそして語り始める

「俺の父親はなつ…死喰い人に殺されたんだ…ハリーも知ってる通り魔法界には蘇生呪文がない…俺もホグワーツに入ってからいろんな呪文書を読んで探したけどあるはずがなかった、そんな悶々としてる時を過ごしてたある日、地面に落ちてた矢尻が落ちてたから拾おうとしたんだ。その時に矢の力でこのACIDMANを身につけたんだ……」

「ということはあるのクディッチ大会の時のスタンド使いは貴様が矢で作ったものか……」

吉良が呟く

「そうだ…矢のことをを調べるために実験台になってもらった……それから色々したさ

…でもダメだった！自分のスタンドは死体を修復したり繋げ合わせて操ることは出来るけど死んだ人間を生き返らせることは出来ないんだ……」

デインの目に涙が流れ落ちる

「だからって他人を犠牲にするのはどうかとおもうよ。僕だってお父さんもお母さんもヴォルデモートに殺されたけど人を犠牲にして蘇えらせたところで困らせるだけだ。今なら引き返せる、まだ誰も人は殺してないんでしょ？」

ハリーはこれ以上友達に人殺しをさせないように説得する

「……だが俺は……」

戸惑う顔をするデイン その時閉じられていた倉庫の扉が開く

「ハアハア、ハリー探したわよ……い！」

「まさかハーマイオニーの扉を開ける呪文、アバカム……だっけ？がなかったら見つけれなかったよ……でこの状況はーどゆうー……」

ハリーを探しに来たハーマイオニーとロンだったが倉庫内に広がる大量の塵とデイン、そして吉良を見て言葉を失う。

「ああ、この2人が喧嘩をしていたようでね、それを私が止めに来たのさ、まあマグゴナルとやらには言わないでしておくから安心したまえ」

吉良はそう言いながらまだ唾然とする2人の間をすり抜け廊下に消えていった

「うーん、まあ状況はいまだによくわかんないけどとりあえず食堂に行こうか、夕食始まりそうだし」

ロンの言葉に反応してハリーとディーンは立ち上がりロン達の元へ向かった

「ありがとうハリー、君が説得してくれなかったら僕……」

ディーンがうつむきながら呟く

「じゃあこのお礼は蛙チョコレート5匹分ってことで」

ハリーがすかさず答える

「ふつまあいいだろうそれくらい」

ディーンが少し笑いながら前を向く

こうしてひとつの矢が起こした事件は幕を閉じたのであった

ハリー、ディーン、ハーマイオニー、ロン↓ディーンは左手に大怪我を負ったがマダム・ポンフリーの手により無事治る。この事件のあと4人とも全速力で食堂に向かうも間に合わずグリフィンボール棟の点数が10×4される

吉良吉影↓夕食が始まる2分前に食堂についたためお咎めなし、夕食の最中ダンブルドアに意味深な目を向けられ心の中でドキツとするけど特に何もなかった

そして……

???

とある墓場に建つ一軒家、もう何十年も使われていなかった建物に今夜は明かりが灯っていた。そしてその一室に4人の男がいた

「おい、お前はまだ矢を刺さないのか……? ペティグリュ……」真ん中のソファに座った男が自分にひざまづいている男に声をかける

「い、いえ我が君、刺そうとはしました。しかし手が震えて……」

ペティグリュと呼ばれた男は身を震わせながら答える

「おいっ！ いい加減にしろこのドブネズミがっ！ また我が君の手をわずらわせるのかっ」

我が君と呼ばれている男の傍に控えている若者がペティグリュを怒鳴りつける

「よい、まあ俺様は寛大な男だもう一回お前にチャンスをやろう」

若者を止めながらペティグリュに声をかける

「あつ、ありがたき幸せー！ 私は一体何をすれば良いのですか!?!」

顔を地面に擦り付けながらペティグリュは指令を待つ

「泳がせておいた矢に食らいついた若者と吉良という男の戦闘を見ていたがああの爆破の能力は魅力的だ……お前がホグワーツにまで出向き奴をこちら側に引き込め、そして同

時にハリーポッターを殺せ、もし失敗したらその場で矢を突き刺せ。そして発現した能力で奴らをなんとかするかそのまま死に絶えろ」

無情に告げる男

「はっ はー仰せのままにー！」

小脇に矢を抱えながらペティグリューはそそくさと部屋を出ていった。

「しかしあんなクズに始末を任せていいんですか？」

自分なら即座に殺す、そう考えて若者は男に問いかける

「ふっ、奴には期待しておらん。スタンド能力が奴に発現すれば良いと思っただけだ。それに」

軽く笑いながらソファアの後ろに立っているランプをいじっている男に目を向ける。

「もしもの時はお前をホグワーツに向かわせるよ、伊達男」

伊達男と呼ばれた男はタバコに火をつけながら男の方を見てニヤリと笑った

運命の歯車は加速する……

↓T o b e c o n t i n u e d ……

第8話 我らは法の体現者

第8話 我らは法の体現者

先の吉良デイーンの戦いから数時間経った真夜中、ペティグリュウはホグワーツに戻っていた。

「くそう……結局「こいつ」を使うことになるのか」

震えながら手に持つ矢を見る

ペティグリュウは「矢」に拒否されグズグズになっていった人間を今まで何人も見てきた。それ故これまで矢を刺すのを拒んできたが、実質死刑宣告をされてはハリーを始末するか矢を刺すかを選ばなければいけなかった。

「やってやる、やってやるくく!!相手はガキだ!いくら強くたってガキはガキに違いない!」

一人で叫ぶいつものネズミの姿、スキヤパーズに戻り廊下を駆け抜けた

???

「我が君、ペティグリュウがホグワーツに侵入いたしました」

遠隔魔法ペティグリュを監視していた若者が主に告げる。

「いや、お優しいですな、あなた様は。私がいた軍ならあんな腰抜けすぐさま肅清でしたよー」

伊達男はタバコの煙を吐きながらカラカラ笑う

男はかつてある大隊に所属していたそしてある人物を始末する命令を受け、思

ように埒を開けよとの指令を実行したが標的との絶対的な力量差によって豚のような悲鳴をあげながら敗北したのであった。

だが今の彼には自分が「ミレニウム」という組織に属していたこと、そして自分が蒼い炎に包まれながら死んだという記憶しか残っていなかった。

「……おい、我が君の前でそんな煙たいものを吸うな……」

若者が若干キレ気味で伊達男を睨む。

「まあ良い、我が忠実な僕クラウチ・j rよ。私達とは違う「世界」の人間だ。礼儀作法が我々と違うのは仕方ないことだ……」

男がクラウチ・j rと呼んだ若者を諫めながら「彼の男」が無理やりこの世界に来た際に来た穴を思い浮かべた。

「（貴様がいなければ私の完全な復活はもう少し遅くなってであろう…… 自称

「神」……）」

ホグワーツ男子

ハリー達はハグリッドの小屋を出て寮に帰るところだった

説明しよう！ハリー達はフォイを傷付けた罪で死刑になりそうになったハグリッドのグリフォンを助けようとしたけどなんやかんやで失敗してしまったのだ！そして今はその帰り道なのであるっ！

「ハア……」ハリーは友だちのペットを助けられなかったことに落胆していた。

「なーんかもう疲れた……」ハーマイオニーは今まで緊張していた糸が切れ3人の中でも一番疲れていた顔をしていた。

それも当たり前であろう。ハーマイオニーは3人の中でも一番ハグリッドを気にかけており、裁判が始まる前に一晩中グリフォンに関する裁判記録を調べていたのだっ！それにしてもこの女、色々と頑張りすぎである

「いやーもう疲れたからとっとと帰ってとっとと寝よう！」

ロンがそう締めくくって歩みを早めた瞬間

黒い大きな犬がロン・ウィーズリーを咥え、連れ去った

「なっ！あれはブラックドッグ、バスカルビス!?」 違います

ハーマイオニーがどこぞのワンちゃんの名前を口にしているが決してあれは獣の類ではない。

「早く追わなきゃー！」

友の危機に考えるよりも先に足が動く。

2人とも持てる限りの体力を使って走ったが流石に大犬に少年の足で敵うはずがなく差はどんどん引き離されて行った。

そしてその様子を見ているものが一名。

「はあ……また私が行かなくちゃあ行けないのか……」

吉良吉影はため息をついた。

「これが杉本鈴美が言っていた地獄なのか？」

そんなことを考えながら犬が駆けて行った方へと歩みを早めるのであった。

暴れ柳の根元の所

「ハアハア……疲れた……ロンはどこ？」

ハリー達は目的地に着くやいなやロンを探し始めたが思ったより近くにいた。

「ロンっ!!」

2人ともロンが無事なことに喜び、近づこうとするが

「きつ来ちゃいけないー!こいつあ畏だつ!」

野郎みたいな声でそれを阻止する。

すると奥からドガバギツ！といういかにも誰かが揉み合っているSEがした後髭だらけでガリガリの男と胸ぐらを掴まれた男が柳の奥から現れた。

ハリーはその男を見て怒りを露わにする

「て、てめえ……！」

ハリーは頭ではなく直感で理解した！こいつが自分の父親をヴォルデモートに売ったシリウス・ブラックであると！

「ちよつと待て！私じゃ無いからね!? ジェームズ裏切ったの！」

ナレーシヨンに気づいたのか慌てて手を振り否定するシリウス

「貴様が裏切つてないという証拠はどこにある？あるんなら30秒待つてやるぞ……」

そんなシリウスを見て更に目を鋭くするハリー、シリウスを信用する気は鼻からないようだった。

その時暴れ柳の上の方の枝から一冊の本が落ちて来た。そして本を落とした人物を見てそこにいる全員が驚く。

「「「きつ、貴様はっルーピン」」先生!!」 デブーン！」

「ル、ルーピン……来てくれたのは嬉しいが随分不安定な場所にいるな……」

流星は年長者、1番早く衝撃から立ち直り旧友に話しかける

「あ、あのルーピン先生、シリウスブラックとは知り合い何ですか？」
おずおずとハーマイオニーが質問する

「2人とも、そんな事はどうでもいい！それより私が投げた本を見るんだ！」

ルーピンがイケメンポーズ(?)でビシツと指をさす

本の近くにいたロンが題名を読み上げる。

「ん、何々？J・Kローリング作のハリーポッターとアズカバンの囚人……？」

とんでもない本を持って来たものである、いや本当に

「一体この本が何の関係があるというのですか」

ハリーがルーピン先生に聞く。

「いいからその本の最後の方を見るんだ！」

ハリーの質問を無視して叫ぶ。

「えーつと……この本の内容って本当なの!？」

本をペラペラ読んでいたロンが目を見開く！

なぜなら自分たちが聞いていた事実とはかなり、いや真逆の事が書いてあったからだ

「先生！シリウスは実は善人でこのペティグリューが裏切り者&僕のペットだって本当

何ですか!？」

色々な感情が混ざり合って結構混乱しているロンが叫ぶ。

「そうだ！この本に書いてある事は事実だ！本当なら私とシリウスが説明する所だけど
なんか色々正史とは変わっているからその本でいいんじゃないかって事だ！」

ルーピンが説明している間に他の2人も本を読み終えたようだ。

「シリウス……あなたは本当にハリーのお父さんを裏切つてなかったの？」

ハーマイオニーが聞く。

その言葉に

「ああ！本当だ！この私を信じてくれ！もし友を裏切るなら今すぐ死んだ方がマシだ
！」

必死に訴えかけるシリウス

「……分かった！信じる！」

ハリーはじっとシリウスの目を見ながら言葉を紡いだ。

そして2人は固い握手を交わした

わけがわからず成り行きを見ていたペティグリューだったがこの一連の流れを見て
自分が窮地に陥っていることを理解した

「あ、あわわわ……」

「さてと、あとはこいつの始末をするだけだな」

ペティグリュューに2人の殺意が向けられる

「ど、どひー！　ちよつと待つてくれ！　私は無実だ！　いや、そもそも何も悪いこととしてないだろ！　ほら、証拠をだせ証拠を！　しよグベ！」

必死に弁解しようとするが上から落ちて来たもの者に言葉の続きを言う事が出来なくなつた

「くだい！　もうお前はおしまいだ！　今のお前はゴキブリホイホイに囲まれたゴキブリだつ！　観念するんだな！」

上から落ちて来たルーピンはペティグリュューを掴み杖を向ける。

「よし、殺ろう、我が友ルーピンよ」

シリウスもそう言いながら杖を構える

「くつくそー！　しくじつたー！　こうなつたらやつてやるぜダボがー
！」

例の作戦を執行するペティグリュュー……

「おいつ！　変な真似をするんじゃないぞ！」

杖をペティグリュューに近づけるルーピンだったが遅かつた

ペティグリュューは自分に矢を突き刺しそのあとピクリとも動かなくなった

「な、なんだあこいつ！自分に矢を刺しやがった！」

予想外の事態に驚くハリー。しかしざわめきを掻き消すかのように何も無い空間から人が話しかけてくる

「まったー！我輩でるタイミング完全に失っちゃったよチクショー！」

腹立たしそうに来ていた透明マントを投げ捨てるスネイプ

ルーピンやハリーの様子が変なことに気付き、尾行していたスネイプだったが一連の流れで出るタイミングをすっかり失ってしまったのだ

「おー、お前の顔を見るのもセブルス・スネイプ」

「そういう貴様こそ元氣そうだな。犯罪者」

シリウスとスネイプが睨み合う

2人は学生時代に敵対しており、殺し合いに発展したこともあるくらい仲が悪いのだ
「さあ犯罪者、アズカバンに戻るぞ。そうだ吸魂鬼を呼ぶか。確かファッジがホグワーツの警備に放っていたはずだから」

そういつた後手を上げて吸魂鬼を呼ぼうとしたが

その必要はないなあ

一筋の死の風が駆け抜ける

数時間前の魔法省

魔法省の通路で2人の男が歩きながら話していた。

「本当ならば然るべき場所で話す事なんだが用が急だ。歩きながら話させてもらおうぞ」

縞柄のスーツ着ている髪が薄いこの男はコーネリア・ファッジ。魔法省のトップに位置する魔法大臣の職に就いてる人物だ

「まあた事件ですか、今度は何処の愚民の仕業ですか」

バリバリの若本ボイスで喋るこの男はルーファス・スクリムジョール。かつて数々の死喰い人を葬った歴戦の戦士だ。狂信的な程に魔法省にないしは魔法法律に従っており魔法省の切る札でもある存在だ。

「実はシリウス・ブラックがホグワーツに侵入したとのタレコミがある。吸魂鬼供では取り損なう可能性がからお前にいつて欲しいのだ」

事務的な口調で資料を渡すファッジ

「なあるほど、では早速出発します」

そう言うときスクリムジョールは懐から法全書を取り出す。

この所々に金属があしらわれている全書は姿くらましの術が掛けられており、これを使えば本来姿くらましをできない場所でも使用できると言う優れたものだ

「魔法省に栄光あれ!!」

そう言うときスクリムジョールは全書から吐き出されるページに包まれ消えた。

現在 暴れ付近

「キシエヤアアア!!」

突如上空から聞こえる奇声に皆一斉に上を向く。

「ブベラ!!」

声の主がスネイプを吹っ飛ばし、スネイプは哀れな声をあげながら暴れ柳にぶつかり気を失った

「フシユウウウ……我らは法の体現者、刑罰の肉体執行人、我らが使命は我が法に逆らう愚者をその肉の最後の一片たりとも絶滅する事……Aggom（魔法省に栄光あれ!!）」

両手に持った刀ほど長い杖を手前にクロスさえながら叫ぶ。

スクリムジョールが法を犯す愚か者を殺す際に被告人に告げる言葉だ

「何っ!!なゼ!!ここに貴様がいる!?!」

シリウスが狼狽する

シリウスも一度会ったことがある。その為こいつがどれだけ「イかれている」かをよく知っていた。

「くっ!!」

ルーピンが杖を懐から取り出すが

「無駄あ!!」

両手に持っていた杖をルーピンに投げつけた

「あぐっ……!!」

スクリムジョールの投げた杖が両腕を貫き暴れ柳に打ち付けられた

「貴様はそこで黙って見ていろお、人狼」

彼は人狼などの半獣人を嫌っており、半獣人の数が激減したのも彼が原因だと言われている

「さて、シリウス・ブラック、貴様に我々の判決を下あす。貴様はこの世に存在する事を許さぬう、よってこの場で貴様を殺す。Aggom!!」

そう言うときまた杖を袖口から取りだそうとするがハリーがそれを遮る

「まって! そのー、スクリムジョールさん!」

「おおー、貴様があの生き残ったおーとこのこかあ」

スクリムジョールはハリーの方を見ると興味深そうに吐息を吐いた

「そ、そうですね！だから一回落ち着きましようっねっ！」

相手が好印象だということに気付いてそれを利用してしようとしますが

「だあめだ……」 ハリーは こうしように しっばいした!!

スクリムジョールは身を震わせ唸り声をあげるとさつき出した4倍の杖を懐から出した。その目は確実に獲物を仕留める狩人の目だった

そして場が緊張に包まれる。その時

「Wait——!!」

ジジイ2人の声が場に響いた。

「ま、まてスクリムジョール！殺せとは言ったが何も子供の前で！」

「だがが場所を変えていたら逃げられていた……ここで殺るのが一番だあ」

言い合うファッジとスクリムジョールを見てダンブルドアは指摘する。

「あー、そのじゃな……ファッジ君、君はホンレンソウをしつかり理解しているのかのお？」

「……………あつ」

このファアツジ、まだ魔法大臣になったばっかでもまだホンレンソウをあまり理解出来ないのだ！でもやれば出来る子なんです！（あの小僧、やれば出来る子だったのじゃあないか……………）

「ファアツジさん！見てください！この本には真実が書かれています！」

今が説得出来るチャンスと考えたハリーはハリーポッターとアズカバン囚人を投げる。

「ん？なんだこれは……………」

ファアツジはハリーから本を受け取るとペラペラめくる、そして目を見開いて驚いた。

「これは……………この内容が本当だとしたら……………我々は大きな間違いをおかしていることになる……………」

震える手で本をハリーに返す。そしてスクリムジョールに命令を下す

「スクリムジョール!!お前は即刻魔法省に戻り、魔法方執行部極刑課を集めペティグリュウを追うのだ……………」

「了解した……………」

スクリムジョールは法全書を開くと現れた時のようにページに包まれ消えた。

スクリムジョールが消えるのを見送った後ため息をつく

「はあ、やはりスクリムジョールは使いにくい……」

本をじつと睨んでいたダンブルドアだったがその言葉に顔を綻ばせる。

「まあしようがないであろう、あやつは昔からそうだからのお」

そういうとハリー達の方に向き直り一校の校長先生の顔になる。

「ハリーよ、そなたの友を助けようとしたその勇氣、賞賛に値するぞ！グリフィンドールに50点！そしてロン、ウィーズリー！犬に噛まれたから10点やろう！もし飲み込まれてたら点高かつたんじゃがのー」

恐ろしいことを言う校長である。

「あ、あのだな……これはどう言う状況なんだ……」吉良が口グインしました

吉良は目の前に広がる光景に口を広げていた。

ルーピンが磔にされてるはシリウスが倒れてるはなんかダンブルドアがハリー達を褒めてるわ

誰だつてそーなる 吉良だつてそーなる

「とりあえず……私が来た意味はあったのか……？」

責任者であるダンブルドアに聞いてみる

「ああ吉良君いたのか、後で話したいことがあるんじゃ、あとルーピン君も話がある

ぞー」

答えになってねーじゃねーか!!

吉良は内心キレながらも表には出さずに

「じゃあ私は帰るぞ……」

1人夕焼け道を戻る吉良であつた……

「わ、我輩惨めだあ……」

シリウス↓無実にはなつたが世間にはその事実が浸透しそうないため秘密裏にハリーの里親となる

ルーピン↓原作とは違って人狼になることなく事なきを得た。今はスネイク特性青汁で無害な人狼になっています

スクリムジョール↓一時撤退、またそのうち……

ハリー達↓グリフィンドールに60プラスされて浮かれた勢いで夕食をかつこんだらリバーズしちゃつた(男子)、ハリーはシリウスという里親が出来た事で幸せな気分であつた

ペティグリュール←

???

「うっぐああああ!!」

ペティグリュールは声にならない悲鳴をあげていた。

矢を刺したあとペティグリュールには記憶がなかったが、ペティグリュールにスタンドが発現していたのだ。そして無意識のうちに発動してスタンドの「能力」で逃げ切ることが出来たのだ。

「随分と早い帰りだな、ワームテール……お前なら一晩中ネズミの姿のまま震えていていると思っていたんだがな……」

頭上から主人の嘲笑うような声が聞こえる。

「わっ、我が君!! 申し訳ございません! ハリーポッターを始末できませんでした!」
ペティグリュールは声が聞こえるやいなや起き上がり土下座をする。

「いや、そつちには正直期待していいのでな……お前の能力を見せてくれ……」

男は手を差し出す。

その姿はかつての悪のカリスマの姿に重なるものがあつた。

「ははあ!!」

ペティグリュウは自分の傍に鏡のように形状をした「それ」を出した。「ふふふ……」

男は含み笑いをしながら「それ」に手を入れる。

男の手は簡単にそれの中に吸い込まれていった。

「ふふふ、これはこれは……」

T o b e c o n t i n u e d ↓

吉良吉影と炎のゴブレット

第9話ヒロインと新たな演者

第9話 ヒロインと新たな演者

アズカバン刑務所

ここはアズカバン刑務所と言って悪い人が入れられる所なんDA☆。ここにいると吸魂鬼に生気を吸われて頭がキチ○イになるんDA☆。皆正気を失っているのがわかるだろお？（以上30秒以内に分かるアズカバンの説明）

アズカバン刑務所にも吸魂鬼が囚人の番をしているとはいえ人間の警備も少なからずいる。

牢屋の人数のチェックや死んだ人間のチェックやなどの仕事だ。

近くに吸魂鬼がいるため危険な仕事だがそれも相まって給料も高いため出来損ないのスクイブや落ちこぼれ魔法使いはこの職につくことが多い。

「ふぁー……」

刺又に寄りかかりながら欠伸をする。

この仕事、前の死喰い人大検挙以来特になんの事件も起きず非常に暇な仕事なのだ。

「つたくこんな所にいたら気がしけるぜ……とつと帰つてアニメ見たい……」
愚痴をこぼしながら葉巻を出し、火をつけようとするが、

「……あれ？」

火がつかない、そして男はある異変に気付く。

「……俺の腕どこいった……？」

男の腕がスッパリ切れたかのように無くなっていた。そして男の頭も悲鳴をあげることに無く地面に落下した。

アズカバン牢獄内

いつもは囚人の周りで幸福を吸収している吸魂鬼も今日は大人しかった。

むしろ何かを待っているようにも見えた。

その静寂を破るかのようにシュツ、という風切音がした後、鉄格子がバラバラに碎け落ちた。

そして崩れ落ちた牢獄内から若い女の声がする。

「あんたが私達の迎えかい？」「伊達男」

牢屋生活で疲れが出ているのか掠れた声ではあったがその邪悪そうな声は健在だった

「ええ、そうですとも。 マドモアゼル（お嬢様）」

トバルカインが答えながら手を差し出す。

流星は伊達男。女の人の扱いにも慣れてる

「フフフ……さあ、時間を巻き戻すわよ……あの日までね」

女は、闇の帝王の右腕であるベラトリックス・レストレンジは歪んだ笑みを浮かべた。この日、アズカバン刑務所から死喰い人含めた囚人約210名が脱走した。

その翌日

「ふいー、今日は楽しいクディッチワールドカップの日だ!!」

ロンが嬉しそうな声を出しながらピヨンピヨン飛び跳ねる

今日、ハリー達とロンの家族はクディッチワールドカップを観に来ていた。

「うーむ……人混みの中に入るのは何年ぶりか……」

シリウスが慣れない目で辺りを見渡し。

結局あの後シリウスはウィーズリー家に一時厄介になることになった。

最初は両親に反対されたものの事情を説明して事なきを得たのであった

「ん……じゃあもう帰るぞ……あまり人目にはつきたくないからな」

ロン・ウィーズリーの父親、アーサー・ウィーズリーが小声でみんなを誘導する
本編では結構出番多めだったから今作では自重するとの事だ（本人談）

「はぁーい……」

ロン達が名残惜しそうに後ろを振り向きながら帰ろうとした時に「それ」は起こった。
突然周りのキャンプが燃えたかと思うと奥の方から花火のようなものが打ち上げられた。

そしてそれはグネグネと形を変えながらあるもの姿になった。

「あれは……蠍體？」

ハリーが呟く。

形はまんま蠍體であった。そして蠍體の口から蛇が飛び出しているその姿はまさに邪悪の象徴のようであった。まあ実際そうなのだが

「あれは……闇の印だ……」

冷静になったシリウスがハリー達に説明する。

「あれはヴォルデモートが使ってた闇のs」

「あ、あのー説明中悪いけど前見た方が……」

その説明をロンが震え声で遮り前を指差す。

そこには道の真ん中を髑髏の面を着けた集団がいた。

そして集団の一番前にいる男は面を着けておらず、杖を振り上げて集団に命令していた。

「はっはっは!! さあテントを焼き尽くせ! 地面に大穴をあけろ! 闇の印を打ち上げろ! 我々の存在を世界に知らしめろ!」

その男をみて、シリウスは声を震えわせながら怒鳴る

「き、貴様はっ! バーンティ・クラウチ jr!!」

するとシリウスの声に気づいたクラウチ jr はシリウス達の方を向くと口を歪めた

「おおこれはこれは懐かしい顔だな、髭の男に生き残った男の子か……それと小虫が数匹……」

「おいっ! 誰が小虫だ!」

クラウチ jr の言葉にカチンときたロンが怒鳴る。

その目はハリーを睨んでいるように見えた

その様子を見たクラウチ jr は笑いながらロンに手を差し出す

「はははつ、中々良い目をしてるじゃないか小僧、我々死喰い人にも人手が必要なのだ。そう、君のような若者のがね、どうだ小僧？我々の仲間になる気はないか？死喰い人に、蛇の目（サーペント・アイ）に」

その姿はさながら自らの主人のようであった。

ロンはその言葉に一瞬言葉を失ったがすぐにいつもの威勢を取り戻す。

「ふざけるな！今すぐそのそつ首叩き落として炉にくべて！暖をとってやる！」

「そうかそうか、それは残念至極。ならばお前達、こやつ首を刎ね炉にくべよ！」
クラウチ jr は肩をすくめながら仮面の部下達に告げ、その場を去ろうとするが

「Aggoooo!!」

謎の声とともに数多の杖が敵の死喰い人に降り注いだ

杖と呼ぶにはいささか尖りすぎている棒が次々と死喰い人を貫いていく

「「ぬっ！」」

声の正体に気付いたクラウチ jr、ハリー、ハーマイオニー、ロンは上を見上げる
それに遅れながら生き残った死喰い人が驚きと恐怖の混じった声を上げる

「お、お前は……」「首切り判事」、「法の番犬」

そして皆が一斉に名を呼んだ

「「「「ルーファス・スクリムジョール!!」」」」

ルーファス・スクリムジョールは死喰い人の方を睨みながら杖を構える

「相変わらず騒がしいなあ死喰い人ども」

そう言い放ちながら死喰い人達に突進し杖で突き刺して行く

ほとんどの死喰い人はスクリムジョールの凶杖(?)に倒れていく中クラウチj rは不敵な笑みを浮かべながらそれを片手で捌いてかわす

「相変わらず手は衰えてないなあ、スクリムジョール」

「お前も前と変わっておらんなあ蛇の目」

2人はそれぞれ杖を相手に向け、臨戦の構えをとる

「いつ今のうちに逃げるぞ!お前達!」

我に返ったロンの父親はみんなの手を取りその場から逃げるのだった

その時もロンは暗く沈んだ目をしていて。

しかしそれに気付くものは誰一人としていなかった。

禁じられた森

ここでも新たな異変が起ころうとしていた。

森の最奥、ケンタウロスでさえ近付かないような危険な場所に1人の男がいた。

その男には短い角が一对生えており、服は着ておらず白いふんどしを巻いているのみだった。

その男は無言で森を突き進む。

普通の人ならば通れないくらい鬱蒼と茂った森の中を木をなぎ倒させずに進む。

まるで肉体が木をすり抜けているようだった。

その男を格好の獲物だと思ったもか大きな熊が男の前に姿を現す。

「ハアアアア……グへへへ、こんなところで何1人でうろついでんだあ？ そんなに死にたいなら俺が食っちゃまうぜ!!」

この熊はただの熊ではなくダースリカントという魔物である

同種のリカントと違い服を着ておらず武器も持たないがそれを補う体躯と腕力を持つていた。

更には大概の魔法を弾く毛皮を持っており魔法においても物理においても隙がない強力なモンスターだ。

恐らくホグワーツの学生でも倒せるものは腕利きの数人しかいないであろう。

そんな魔物を尻目に男はまるで眼中にないかのように前を通ろうとする。

その態度が頭にきたらしくダースリカントは目をギラつかせながら咆哮をあげる。

「おい貴様ああ!! 俺を無視するんじゃないやねえええ!! 決めたぜ、お前が今晚の食事だ
あアアア!!」

ダースリカントはその豪腕を男に向かって振り下ろす

しかし男は身動き一つしない

当然、豪腕は男の両肩に突き刺さる……が何かがおかしかった。

「ぬあ、なんだああ!!俺の腕が吸い込まれる……!?」

ダースリカントの腕がまるで男と一体化したかのように繋がっていた。

さらに男はまるで「吸収」するかののように腕を引き寄せた。

「なっ、やめろ!!ぐわああアア!!」

こうして森の孟者は男に取り込まれたのであった。

そして一人残った男は首を鳴らすと喋り始める。

「(ト)……(ト)……は、ど(ト)だっ……っ」

男は今まで言葉を発してことのないような喋り方をする。

そして彼はこれからどうするか考える。

そして1つの考えに行き着く。

「……とりあえず……人間を、探してみるか……」

クンクン、と獣のように匂いを嗅ぐと、向きを変えると、歩みを進めた。

奇しくもそつちはホグワーツの方向だった

ここに闇の一族、再来する……

同時にこの森には、もう1人男がいた。

「うーん、ここはどこだ？」

男は頭をかき、いつも被っている帽子がないことに気づく。

「あつれー、どこにやったかのお？」

もつとあの帽子は相手を油断させるために被っていたものだったのでまあいいか頭を振り動き出す。

それから歩く事数分、男は未だに森を抜け出せずにいた。

「あちやー、こんなことになるならコンパスでも持って来ればよかったかなー」

独り言を言いながら歩いていると突如上から何者かが落ちてきた。

「ぐがあっ！ これで奴らを少しは撒ける……ん？」

落ちてきた人間らしきものは男の方を見ると牙を剥く

「なんだあ貴様は!!魔法省の追っ手か!？」

しかし男はそれを見たまま身動き一つしなかった。

それどころか妙な立ち構えをして男に向いた。

「おいつ、俺がノスフェラト・キュウモケツブ・キと知つてのことか!？」

ノスフェラト、つまり吸血鬼（自称）のキュウモ・ケツブ・キは牙を尖らせ男に飛び

かかる

その様子を見て男は微かに笑みを浮かべる

「ホッホッホ、急に飛びかかるとはいかんう。戦いとは常に冷静（クール）でなければいけないのだよっ！」

男はおもむろに体を動かすと腕を男に向かって伸ばした!!

その腕は関節を外れ、本来届かない相手まで届いた!

「GYAAAAA!!な、なんだ!パンチが当たった場所が溶けていkgグフ……」

モブ吸血鬼、キュウモ・ケツブ・キは森の栄養分になったのであった。

「さて、行くか……」

男は服についた「塵」を払いながら歩き始める

「さて行ってみるか……あやつの言ってた「魔法省」とやらに……」

ホグワーツ大食堂

夜の9時頃ホグワーツ大食堂では様々な料理が運ばれ、賑わっていたがハリー達の周りのテーブルは沈黙に包まれていた。

3人も、主にロンが一言も喋らず次々くる食事を掻っ込む。

そしてそれを遠目で見ているハリーとハーマイオニー

絶対に居たくない雰囲気的空間である。

そこから少し離れた教師席で吉良は食事を嗜んでいた。

「うん、今日も中々美味しいじゃあないか」

パンを頬張りながら吉良は考える

吉良自身も決して不味くはないご飯を作れるが、ホグワーツの味には敵わなかった。

そんな中ダンブルドアの声により夕食は遮られる

「皆のもの、今日はとても良い知らせがある！今日から2人の新任教師が来る！」

その言葉に皆が拍手をする

その拍手の中、2人の男女が教師席に上がる

そのうちの髭の生えた男性がみんなに向かって軽く会釈する。

「みなさんよろしくうー」

(コシヨウパラパラ

それから片方の女性が可愛らしく手を上げる。

「フウー、私が辻彩よ、よろしく」

その時おそらく、いや確実にホグワーツの全生徒がこう感じた。

「「めっちゃキャラ濃いやつらが来たな……」」と